
夢処刑人

タナペン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢処刑人

【Nコード】

N8753W

【作者名】

タナペン

【あらすじ】

人の悪夢を取り払う能力を持つ主人公、渋谷光一郎。時間にシビアな彼は、常に一分単位で作られたスケジュール帳を基に行動をしている。

そんな彼が向かう先は、過去の事件の夢に悩まされる元刑事、色とりどりの部屋を巡る夢に悩まされる女、人を殺す夢に悩まされる男……。

『私に処刑できない悪夢などない。なぜならば、私は夢の中では神そのものだからだ』

ある元刑事の悪夢 1

1

駅前のコーヒーショップにはそう長くは無い、しかし地味にイライラしそうなくらいの行列が出来ていた。

その最後尾に並ぼうか並ばないかを迷っているうちに、どんどんその行列は一人また一人と増えていく。今ここで並ばなければ後悔することになるかもと思い、五分ほど迷ったあげく来た時よりだいぶ長くなってしまうた列に並んだ。

春先とはいえまだ肌寒い風が、並んでいる全員の体を舐める。そして全員が同じように身震いし先頭へ催促の目を向ける。それと同時に、早く店内で温かいコーヒーあるいはココアかホットミルクを飲んで体を休めたいと考える。

渋谷光一郎はしかし、そんな寒さよりも列に並ぶ決断を下すのに五分も掛かってしまったという不甲斐なさに苛立ちを覚え、思いつきり人目などを気にせず自分の頬を自分の拳で殴りつけてやりたい衝動に駆られていた。

彼は二十四時間という限られた時間を一分一秒あるいは一瞬の決断も無駄にしたくないのだ。それが彼のポリシーであり価値観であり生き方あるいは人生そのものだった。そうすることで誰よりもいや、地球上のどんな生物よりも時間を有意義に、そして丁寧に過ごしているのだという優越そして征服感に酔いしれるのだ。

腕時計を見ると午前七時二十四分三十六秒。今、三十七秒。彼の時計は正確に時を刻む。それは一秒の遅れもあつてはならない。だから毎日、朝目覚めた時はラジオをつけてきちんと自分の時計が正確な時間を示しているかを確認する。

それでも心配だから電話の時刻合図で確認を取る。一秒でもずれていたらもちろん直す。いや、だいたいの場合その時計を捨ててしまふ。一度狂ってしまった時計はまた狂う可能性がある。そんなもの

はただのガラクタにすぎない。だから新しい物に買い変える。それがたとえロレックスであったとしても。ただ正確に時を示してくれさえすれば、それが千円のものでもいいし、百万のものでもいい。キャラクターの物でもいいし、もちろんロレックスでもいいのだ。

今日はアメリカンコーヒーのトルサイズにシナモンロールを食べよう。シナモンロールは砂糖をたっぷり掛けてもらって温めてもらう。そして林檎の皮を剥くようにシナモンの表面をゆっくりと上から剥ぎ取り、すべて剥ぎ取った後でそれをフォークで崩し全体に砂糖がいきわたるようにする。そして冷めてしまわぬうちにスプーンですくい取って食べるのだ。カプチーノは少しぬるめにしてもらう。行列のせいで（いや、自分が列に並ぶか否かの判断が遅れたからかもしれない）今日のスケジュールが間に合わなくなってしまいかもしれない。いつものペースで飲んでしまえば、これからの予定にずれが起きてしまう。だからその時間を埋めるためにぬるめのカプチーノをいつもよりペースを上げて飲むのだ。

しかし朝早くだというのにこの人の数はなんだ。よくもまあコーヒーを飲みたいがために寒い風を受け、身を震わせるものだ。

渋谷はこの店のコーヒーを一度も美味しいと思ったことがない。こんなインスタントを少し贅沢にしたような代物にコーヒーの魅力も奥深さもない。横断歩道を渡った所にある喫茶店『珈琲館』の方がよっぽどコーヒーと呼べたし、もちろんいつも挽きたてを提供してくれたし、その香りはどんな香水よりもあるいはどんな女性フォルモンよりも彼を興奮させそして落ち着かせた。

何故このコーヒーショップに並ぶかというのは、ただ朝早くからコーヒーを飲める場所がここしかないから。珈琲館は朝の十時から開店するのに対して、ここは六時半からコーヒーの香りを漂わせている。渋谷にとって朝のコーヒーはこれから仕事をするにあたっての儀式のようなものであり、カフェインを体の中に取り込むことによって活力をみなぎらせることができるのだ。つまりコーヒーを飲むという行為は、渋谷にとって野球選手がネクストバッターサークル

に入るのと同じくらい当然のことであり、赤子がミルクあるいは母乳を欲しがるのと同じくらい必要不可欠なものだった。

そしてそれは自動販売機にあるような缶コーヒーでは駄目なのだ。やはり喫茶店やこのようなファスト店で飲まなければならない。席に座り煙草を吸い、コーヒーをすすり今日の予定が書き込まれた手帳をゆっくり眺める。そうしなければコーヒーを飲んだ気にならない。

ようやく順番が回ってきたのでアメリカンとシナモンを注文する。シナモンロールを注文しようとした時、レジ横のショーケースに入ったレモンケーキが目に入る。レモンケーキはショーケースの照明を浴びてとても美しく光っていた。洪崎はシナモンと言うとした口をつぐみ、「あとレモンケーキをくれ」と言った。

窓際の席へ腰掛ける。目覚めたばかりの街の景色を少しだけ眺めてからコーヒーを飲む。最初の何口かはブラックで飲み、それから砂糖を入れて飲む。その味に慣れてきたら最後にミルクを入れて味わう。やはりなんら品のない味だった。

レモンケーキをフォークでつつきながら、手帳を開いた。そこには事細かに（食事をする時間や休憩する時間はもちろんのことトイレへと行く時間まで書いてある。その時間になれば彼は出たくなくても用を足す。逆にいえば出したくても出さないのだ）ミミズが這ったような字で書かれている。

今日は二件。ややこしそうなのと簡単に終わりそうな。夕食の時間には家へ戻るだろう。晩御飯には鶏肉とピーマン、玉ねぎを買ってきてある。それらをブラックペッパーで炒めて赤ワインと一緒に堪能するつもりだ。

腕時計を見るとあと十六秒で仕事場へと向かわなければならなかった。慌ててコーヒーカップと皿を片付け、店外へと出た。

一件目はここから歩いて五分ほどの所にある。向かいながら煙草を吸った。コーヒーショップで吸う暇がなかったからだ。メンソー

ルの香りがコーヒーで満たされていた口あるいは鼻腔に滑らかにそして気持ちよく入っていく。じつくりと味わってから吐き出す。白い息に混じって煙がまるで靈魂のように抜けていく。

渋谷は黒のトレンチコートに黒のズボン、そして靴も黒の革靴を履いていた。遠くから見るとそれは一つの大きな影に見えたとし、人々の悪がその一箇所だけに固まっているかのようにも見えた。彼が歩く度にその大きな影もしくは悪の塊が揺れた。あるいは街の中に突如現れた何故のブラックホール。ブラックホールは人々を飲み込むわけでも脅威をもたらすわけでもないが、それでも近付けば吸い込まれそうな、何か恐ろしいことが起きるのではないかと思わせるような存在感を出している。

顔は整っていて、何処かの国のちよつとばかり名の知れた彫刻家が、次の仕事が入るまでの間に暇潰しに彫り上げた決して価値があるとは思えないが、かといって安物ともいえない彫刻のような、そんな顔だ。鼻は天に向かって緩やかなカーブを描きながら伸び、その鼻を際立たせるかのように小さな口がある。

そして彼の特徴的な部分。鋭い眼光。獲物を詮索するかのようなあるいは睨み殺してしまうのではないかというほど鋭く恐ろしい目。黒目が大きく白目がほとんど見えない。虎のような目でもあったし、鷲の目のようでもあった。あらゆる肉食動物の目であるとも言えた。さほど大きくないそして何十年も前からあるようなビルの前で立ち止まる。

昇りきつたばかりの熱い太陽の光を浴びているはずなのに、目の前のビルはその光を吸収し中へ押し込め、代わりに真夜中のひっそりとした闇を放出しているように見えた。それほど淀んでいたし古びていた。

三階建てのようで、それぞれの階には窓が見える。一階には不動産屋の看板が、二階にはテナント募集中の張り紙が、そして渋谷がこれから向かう三階には古本屋の看板が掛けられている。

エレベーターに乗り三階のボタンを押す。腰の悪い老人が椅子か

ら立ち上がるかのように、エレベーターはゆっくりと上昇していく。扉が開くと正面に短い廊下があり、突き当たりに『桑野書店』と書かれたドアがある。

洪崎は小さなそれでいて深い溜め息を一つ吐くとそのドアへ向かって歩き出す。時計を見ると八時五分二秒。時間ぴったりだ。

ドアを開けるとかびの臭いと異常なくらいの埃が鼻と目を攻撃してきて、洪崎は思わず顔をしかめた。咳とくしゃみを何度かして、ポケットから黒い色のハンカチを取り出し鼻水を拭いた後ようやく店内を見回す。

二本の本棚がこちらを向いた状態で横に並んでいる。その本棚の中には色あせた本が今にも飛び出さんばかりにぎっしりと並べられていて、それは洪崎に窮屈で息苦しい満員電車を思い出させた。無理矢理押し込められた本は、朝のラッシュのすし詰め状態の人々に似ている。

二本の本棚の後ろにもそれぞれ本棚が置いてある。合計で四本の本棚だった。それらを消えかけた蛍光灯ランプが照らし、それと同時にまるで雪のような埃を浮かび上がらせていた。

床にも本棚に収まりきらなかつたのだろう、本が何冊も重ねて置いてある。枕に使えるような高さに積み上げられたものから、ジェンガのようにちよつと間違えば崩れ落ちてしまいそうなほど積み上がったものもある。歩こうとするのだがたださえ狭い店内にその本は邪魔で、重ねてあつた本を何回か倒してしまった。

本棚を抜けるとそこには木製のかなり使い古された、というかもう使い物にならないくらい老朽化した机がある。やはりその机の上にも無数の本が重ねて置いてある。その机の前で椅子に座っている初老の男。白いシャツに赤いベストを着ている。少しだけ剥げた白髪混じりの髪。かなり年齢を重ねてはいるが、若い頃に何か運動をやっていたのだろうか、随分とがっしりした体付きをしている。辞書のように厚い本をまるで生きる意味を見出すかのように、必死に読んでいる。

渋谷の顔を見て「なんか用？」と低くて聞き取りにくい声で聞いた。男はこの場所に相応しい人物に思えた。いや、この埃とかびだらけの部屋が男を見るからに根暗な雰囲気仕立て上げたのかもしい。

「君には交渉する権限そして断る権限がある。もちろんその交渉は成立しない場合もあるしその断る権限もまったく無駄になってしまう場合もある。それはまず理解していただきたい」

渋谷はなんの意味もなさない参考書をなんの感情も込めずにただ淡々と読み上げるようにそう言った。

「何を言ってるんだ？ 冷やかしたら帰ってくれ」

男はそう言うのと再び本に目を向ける。

「私の名前は渋谷光一郎。依頼を受けてここへやってきた」

渋谷がやはりなんの感情もまた抑揚もない声でそう言うと、男は眉間に皺を寄せまるで異物を見るかのような目で渋谷を見た。全身黒尽くめの渋谷は見ようによつては異物なのかもしれない。

「あんだ頭がおかしいのか。追い出さず。私は誰にも何の依頼もしてはない」

「桑野幸平だな？」

「なんで俺の名前を知ってる？」

「私は警察でもなければ役所の人間でもない。私は……」

渋谷はそこで一旦言葉を切ると、自分という人間を再確認するかのようにあるいはこのような能力を持って生まれてきた自分を恨むかのように深く長く深呼吸をする。

そして「私は、君の夢を処刑しにきた、夢処刑人だ」と言った。

時が止まってしまったかのように、空気が移動するのをやめてしまったかのように重苦しい沈黙。しかし相変わらず埃は宙を舞っていたし、渋谷の腕時計は正確に時を刻んでいた。

「何を言っているのかさっぱり分かん。夢処刑人？ ふざけるのもほどほどにしる」

桑野は一瞬だけ呆気にとられていたが、すぐに眉間に皺を寄せた。

渋谷が言う。

「お前が毎晩、悩まされている夢があるだろ？ ほら、あのお前が解決できなかった事件の夢だよ」

その言葉を聞いた桑野幸平はしばらく瞬きもせずに渋谷を見つめていた。ゆっくりと唾を飲み込み、鼓膜の中へと入ってきた言葉を心の中で反芻する。口に入れたんだか分からない物をゆっくりと舌で確認しながら噛み砕くかのように、あるいは聞き慣れない数式を何度も復唱するかのよう。

そして何かを察したのかゆっくりと本を閉じると静かに立ち上がった。ふたたび唾を飲み込み、拳を固く握り締める。全てを物語るかのように一筋の汗が頬を伝う。

「なんでそのことを知っているんだ？」

桑野幸平は喉奥から声を絞り出すようにそう言った。渋谷が答える。

「夢の中で私に出会ったはずだ。あるいは君は私が目の前に現れた時点で薄々察していたんじゃないのか？ 夢の中の男がやって来たと。自分の悪夢を取り払ってくれるのだと」

渋谷は両手を広げその黒ずくめの服装を桑野に見せびらかすように、あるいは夢の中の男と重ね合わせようとするかのようにくるりと一回転する。

「君が夢の中で出会った男はこの私だ。私は君に依頼されたからその通りに君の所へやってきたんだ」

桑野は目を閉じ、昨夜の夢の中の出来事を思い出そうとした。

毎日、同じ夢を見てきた。正確に言えば刑事を辞職したあの日から見るようになった。

人々に夢を見せる映写機が何処かにあって、その映写機がなにかの誤作動で（それはフィルムの痛みであったり、レンズの汚れだったりするのだ）自分にだけいつも同じ夢を見せている。他の者は毎日違う夢を見ているのに、自分にだけ繰り返し同じフィルムを流し、映写技師はそれにまったく気付かず、しかしフィルムを回す手が止

まることはない。そんな風に思えるほどいつも同じシチュエーション、同じ登場人物、同じ会話、そして同じところで目が覚める。頭の中で夢に出てくる人々の声が一言一句刻まれ、そしてそれはいつしか悪夢として桑野を苦しめた。

「そうだ、私は夢ではシルクハットを被っていた。もちろん色はブラックだ。そうだろう？」

洪崎は顎に手を当て桑野の様子を伺う。時計を見ると五分が過ぎていた。早く交渉に入らなくてはこの後の計画が狂ってしまう。

「意味が分からない、帰ってくれ」

桑野は震える声でそう言った。洪崎は肩をすくめ眉を吊り上げる。「単刀直入に言う。君の悪夢を私が取り払ってやる」

洪崎はこれ以上時間を無駄に過ごしたくない思いと、時間に追われてしまっている自分に苛立ちを感じていた。そして仕方なくそう言った。

桑野はもう一度目を閉じる。そんな馬鹿な話があるものかと自分に言い聞かせながらも、昨夜夢の中に出てきた男の言葉が気になっていた。いつも見る夢。しかし昨夜の夢は少しだけ違っていた。

桑野は夢の中で紺色の背広を着て、赤のネクタイを首に巻いていた。胸のポケットには警察手帳。ポケットにはシャツポと手錠。そして少しだけ若かった。それでも今と同じように顔に紋章のような深い皺があつたし、声もどこか疲れていた。

目の前には女性の遺体。仰向けに倒れている。真っ白なワンピースを着ている。そのワンピースの白を首から流れる赤い血が汚し、それはなにか貴重な芸術作品のようにも思えた。喉元には女性を死に至らしめた凶器それはつまりナイフが、震え上がるほどの量の血を付着させたまま刺さっている。

それほど広くはない部屋。窓がドアを開けた正面にあって、レースのカーテンが風に揺れている。部屋の隅に子供用のベッドがある。枕元には両手に抱えるくらい大きなウサギのヌイグルミが置いてあ

る。その横に勉強机があり、上にピンクのランドセルが乗っている。小さな筆筒が置いてある。筆筒にはキャラクターのシールやプリクラが貼ってあり、そのうちの数枚かは剥がそうとした形跡があった。フローリングの床には像のキャラクターが描かれたカーペットが敷いてある。そのカーペットの上、ちょうど部屋の中央にその死体はあった。

『もうやめましようよ。何度目ですか？ 家の人も嫌がっているじゃないですか』

不意に後ろから声がする。センター分けした髪、顎がやたら細い顔、垂れ下がった目、流れ出る汗を背広の袖で拭い呆れた表情で桑野を見る。桑野の部下だった。

桑野がまだ証拠が何処かにあるはずだと返すと、部下は顔をしかめ部屋を出て行く。

桑野は床に伏せなにかと探し回る。髪の毛一本も見落とすまいと目を凝らす。光るものが視界に入るとじっと睨め付け、それが日の光によるただの見間違いだと気付くと肩を落とす。それを繰り返す。

頭上で声がする。顔を上げると五歳くらいの女の子が立っている。無邪気な笑顔でおじさん遊ぼうと言ってくる。そして桑野の返事を待たないまま筆筒の中から小さな箱を持ってきて、中からおもちやの宝石やらお金やらを取り出し桑野に自慢げに見せる。桑野は女の子を相手にはせず作業を続ける。女の子はつまらなさそうな顔をして、その宝石やらお金を箱の中へと戻す。

『なにやってるの沙織ちゃん。こっちは来なさい』

ドアが開き、険しい表情をした老婆が現れる。そして女の子の手を引っ張る。桑野のことを冷めた目で見下ろしていた。老婆は女の子と共に部屋を出て行く。

桑野の作業は止まらない。更に身を伏せ、その姿は床と一体化してしまうのではと思うほど密着している。大量の汗が頬をあるいは脇を伝っていく。目に入ってくるのはやはりカーペットの上を浮遊す

るわずかな埃だけ。

そこで場面が一転する。しかし場所はやはり同じ部屋。違うのは目の前に倒れていた死体がそこに立っているということ。真っ白なワンピースに真っ黒な長い髪の女性は、死体としてそこには存在せず、まだ恐らくは殺される前の生存していた状態でそこに存在している。

女性は窓の外を眺めている。長いまつげが特徴的で、瞳は遠くの誰かを待っているかのように切なげで、桑野はその表情に一瞬だけ息を呑む。その顔はどこか先程の女の子に似ている。女性は窓から離れ、部屋をやはり切なげな表情で見回す。

誰かが部屋の中へ入ってくる。女性は頬を緩め相手を歓迎する。桑野の目には、その相手は影として映る。人の形をしているのに姿まじりや表情も読み取れない影。

影は女性へと歩み寄る。桑野は激しい声で逃げろと言っただが、女性はそれを無視して影の方へと近づく。桑野の声は女性へと届くはずもないのだ。そこでの桑野はただの傍観者。ただ事実を事実として受け止めるだけのあるいはその事実を捻じ曲げてはならない存在なのだ。

影がなにか床に落としたのだろうか、気付いた女性が身を屈めそれを拾おうとする。その瞬間、影からナイフが伸び女性の喉下に突き刺す。女性は一瞬、なにが起きたのだろうかとう疑問の顔をした後、すぐに自分の喉にナイフが刺さっていることに気付く。声を上げようとするのだが、もちろんナイフのせいではそれは発せられることはない。

桑野はその一連の出来事が起きている間、何度も手を伸ばそうとした。何度も声を上げた。何度も影を取り押さえようとした。桑野は全身が恐怖と怒りで震えるのを感じながら、何もすることの出来なかった自分を悔やみ泣き濡れていた。

そしてまた場面が変わる。死体の横でやはり桑野は証拠がないかと床を這いずり回っている。

『もう何も見付かるわけがないわ』

声がする。しかしそれは部下の声ではない。女の声。部屋を見回すが声の主は見付からない。

『いいかげんあきらめたら』

声は死体から発せられていた。桑野は耳を疑う。

仰向けに倒れていた死体が起き上がり桑野を切なげな目で見つめる。喉元からは大量の血を流している。しかしその発せられる声は美しく、血など出ていないかのようだった。そしてなにもかも遅いのだといった様子でかぶりを振ると、桑野がそうしていたように床を這いずり近付いてくる。そしてその青白い顔が桑野の目の前にくる。生前の面影はなく、紫色の唇、痩せこけた頬、枯れたまつげ、そして喉元から流れ出る血はその青白い顔のせいもあってかやけに綺麗にそして鮮明に赤く光っていた。

『もう遅いわ』

死体は桑野の耳元でそう言うと言つと唇を吊り上げた。

そこでいつも目が覚める。全身は滝に打たれたかのようにぐっしよりと濡れ、高度の熱を帯びているはずなのに指先が震え、激しい喉の渴きに襲われ、涙が頬を伝い、そして現実に戻ってきたのだと自覚したところでようやく安堵の溜め息を付く。

そうやって何年も見続け、苦しんできた夢だったのだが、昨夜は少しだけ違っていた。目が覚める瞬間（死体が笑うあの瞬間）いつもなら叫び声あるいはうめき声を上げて起きるはずなのに、目が覚めなかった。実際、昨夜も桑野は叫び声を上げていた。映像が数秒真っ暗になり、次の瞬間、桑野は赤い絨毯の上に立っていた。

そしてそこは空の上だった。雲が眼下に見え、見惚れてしまうほど視界は真っ青で、風一つなく、思わず伸びをしたくなるほどだった。その上を赤い絨毯が果てしなく伸びている。振り返ってみてもやはり絨毯が伸びている。この空という世界を一周しているのではないかと思った。

絨毯は浮かび、桑野はその上に立ち、そして目の前には真つ黒な身なりをした男が立っていた。空の青と絨毯の赤と男の黒が妙なコントラストだった。しかしそれはあるべき形としてそこに存在しているのだと思った。空は青として、絨毯は赤として、もちろん男も黒として。

『苦しいか』

男は言った。桑野はその言わんとする意味がすぐに理解できたので、深くそして心から頷いて見せた。

『そうか。それならばお前の悪夢を取り払ってやろう』

男は被っていた黒のシルクハットを取りそう言った。そして深々とお辞儀をする。

『明日お前の元へと行く』

そこで目が覚めた。いつものように汗や涙あるいは手の震えがなかった。その代わりなんともしないような憂鬱で落ち着かない気分があった。

ある元刑事の悪夢2

「さつきも言ったように君には交渉する権利も断る権利もある。私
の話が信じられないのならそれでいい。この依頼を断ってもらって
けっこうだ。あるいは君が仕事を依頼した場合、どの程度、夢を取
り払っていいのかもしくはある部分をピンポイントで取り払って欲
しいのか、そういう交渉をすることができる。そのことに関して私
は最善の努力をするつもりだ。しかしかなりの労力と集中力を要す
ることもあつてか、難しいことではある。あるいは上手くないか
なことだつてある。それは前もって理解していただきたい。私からは
以上だ。やるかやらないかは君が決めてくれ」

そこで洪崎は言葉を切り、一つくしゃみをする。そして「それと、
やるかやらないかは、あと四分三十二秒で決めてもらいたい。それ
以降は一切なにも受け付けない。ちなみになんの返事もない場合、
わたしはやらないと判断する」

それから洪崎は腕時計をじつと見やり、確実に時を刻む針を目で
追い掛け、鼻へと進入してくる埃をハンカチで防ぎ、相手の返事を
待った。

桑野は何も言わなかった。迷っているのかあるいは洪崎の言葉をま
だ疑っているのか、眉間に皺を寄せ、洪崎を睨み付け、口を一文
字に結び、伝う汗を拭おうともせず、立ったまま身動きをしない。

そうやって二分ほどした経過した頃、桑野が言った。

「それは本当なのか？」

「というと？」

「私の夢を取り払ってくれるのか？」

「ああ、もちろんだ。そのために私はここへ来ている」

洪崎は時計を見たまま応える。あと一分五十二秒。こんなくた
らない仕事などさつきと終わらせて、家に帰って昨夜録画しておいた
ワールドプロレスリングを見て、その芸術的なエンターテイメント

シヨールに酔いしれて、村上春樹の『スプートニクの恋人』を読み（もう三回も読み返している）熱いシャワーを浴びて少しだけ早いベッドの中で休みたかった。

そのためには、夕食を堪能する時間も含めて夕方の五時四十二分までに仕事を終わらせる必要があった。他人の夢になど実際は興味もなければ、救ってやろうという気もない。

しかし人の夢を救うことが彼の仕事だった。牧師が教えを説くことにいいかげんうんざりするように、役所の人間が書類に判子を押しことになんのやりがいも感じないように、渋谷もまた自分の仕事にうんざりし、やりがいも感じていなかった。

「質問がある」

桑野が言った。

「なんだ？」

「夢……は、どうやって取り払うのだ？」

「正確に言うとり取り払うのではない。夢というのはそもそも見る人間の欲望だったり、しがらみだったり、憎悪だったり、様々な思いからなるものなんだ。禁煙を始めた奴が夢で煙草を吸う夢を見るというだろ？ つまりはそういうことだ。煙草を吸いたいという思いが夢の中で欲望となって出てくる。私はその欲望であったり憎悪だったりするものを満たしてやるまたは解消してやる役目なのだ。もちろん夢の中で。君の場合、君が定年前に解決できなかった事件（イコール現在も見続ける悪夢）を私が代わりに解決してやるのだ」

「夢の中で？」

「ああ」

「そんなことできるのか？」

「まあ、はっきり言うことができるかどうかはやってみなくちゃ分からない。君が見ている夢の情報を頼りに事件を解決するのだからな。まあ、安心しろ。過去にこういうケースがいくつもあったがどれもうまくいった。というか、失敗はありえない」

「うまくいく？」

「ああ、うまくいく」

「そんなわけがない」

桑野は机を思いつきり手で叩きそう叫んだ。老朽化した机が不穏な音をたてて激しく揺れる。机の表面を漂っていた埃がばね仕掛けの人形のように一気に飛び上がる。そしてその埃はしばらく宙をさまい、渋谷の鼻あるいは口へと侵入し、渋谷はまた咳とくしゃみをする。

「そんな簡単な事件ではなかった。あれは私が刑事として扱う最後の事件だった。それと同時に始めて屈辱と無念を感じる事件でもあった。長年刑事をやってきた私が解決できなかったというのに、お前ごときに解決できるわけがない」

興奮する桑野を冷ややかな目で渋谷は見つめ、だだをこねる子供を諭すようにゆっくりとした口調で返す。

「いいか？ 私は夢を処刑し続けてきたプロフェッショナルだ。君がどういう刑事だったのかは知らんし、君が悪夢を見るほど苦しんだ事件がどれほど困難だったのかも知らん。しかし私に処刑できない夢など存在しない。それが例え眠るのが嫌になるほどの悪夢だったとしてもだ」

そこで時計を見る。あと三十四秒。タイムリミットが迫っている。「ほら、時間がないぞ。やるのかやらないのか？」

唇が震え、滴る汗はいよいよ大粒に変わり、やはり桑野は渋谷の顔をじつと見る。

「私の夢に昨夜出てきた時、何故その時にやってくれなかったんだ？」

桑野が言う。渋谷はすぐに答える。

「ああ、その質問はよく受ける。私は人の夢の中に入れる。しかし言うなれば私は夢を見る者にとっては異物なのだ。夢の中に存在してはならない者なのだ。胃の中に異物が入ってきたら、人は吐き出そうとするだろ？ あれと一緒にだ。人は自分の夢から私という異物を排除しようとする。たとえ夢に入れたとしても、もって数分しか

入っていることができない。だから相手の許可が必要なのだ。相手の許可があれば、夢の中にいくらでもいられるし、もちろん夢の中の物を触ったりまたは壊したりもできる」

そして渋谷があと十秒と言ったところで何かが吹っ切れたように、あるいは覚悟が決まったかのように桑野は椅子に腰を下ろすと「やれ」と低く重みのある声で言った。

「それは実行していいということだな？」

「ああ、そうだ」

渋谷は時計から目を離すと、唇を吊り上げた。その顔があのお悪夢に出てくる死体の笑い方に似ていて、桑野は唾を飲み込む。

「どうやればいい？」

「ああ、簡単だ。別に眠る必要もない。ただ私が夢の中に入るといふことは、君を強制的に夢の中へ連れ込むということだ。意識はなくなる。そして意識がなくなる代わりに君自身も君の夢の中へ入ることになる」

「私自信が夢の中へ？」

「なにも心配いらぬ。痛くも痒くもない。なんせ君が生み出した想像上のものだからな。さあ、目をつぶりいつも見ている悪夢のことを頭に思い浮かべてくれ。そうすれば私はすんなりと中へ入っていける」

桑野は言われた通りに目を閉じ悪夢を想像する。額に渋谷の指先が触れる。

「一つ言い忘れたことがある。目を閉じたまま聞いていてくれ。私は夢とは別に君の記憶の中を探る場合がある。この場合も特に痛みなどはないが、少しだけ息苦しく感じるかもしれない。しかし悪夢を処刑するために必要なことだから理解してもらいたい」

「ああ、分かった。いいから早くやってくれ」

半信半疑だった。突然現れた得体の知れない男に夢を取り払ってやると言われて、はいそうですかよろしくお願いしますと簡単に信じるわけもなかった。しかし、そんな不気味な男の存在以上に、自

分が見る悪夢は苦しくそして絶望的で、あるいはこのままこの得体の知れない人物に殺されてもいいとさえ思っていた。悪夢をもう見ずにいられるのならどんなに楽だろう、どんなに幸せだろうと考え、心の奥底で反抗する己の理性を振り払い、身を任せるしかなかったのだ。

「それでは始める」

その声が耳に届くか届かないかのうちに意識が遠くなる。それはまるで麻酔を打たれたかのように安らかで、もしかすると本当にこのまま死んでしまうのではないかと思った。

ある元刑事の悪夢 3

憂鬱だった。あの様子ならきつと断るだろうと思っていたからだ。まさかやるはめになるとは。洪崎は今日何度目か分からない溜め息を吐くと、彼、桑野の夢の中へと入っていく。

視界が埃まみれの部屋から一瞬にして、桑野が見ていた夢の部屋へと移動する。

窓がドアを開けた正面にあり、レースのカーテンが風に揺れている。それは爽やかとは言い難い生ぬるい風だった。部屋の隅に子供用のベッドがある。枕元には両手に抱えるくらい大きなウサギのヌイグルミが置いてある。その横に勉強机があり、上にピンクのランドセルが乗っている。小さな筆筒が置いてある。筆筒にはキャラクターのシールやプリクラが貼ってあり、そのうちの数枚かは剥がそうとした形跡があった。フローリングの床には像のキャラクターが描かれたカーペットが敷いてある。そのカーペットの上、ちょうど部屋の中央にその死体があった。

洪崎は身を屈め死体を観察する。喉元にナイフが突き刺さっている。あまり深くは突き刺さっていないが、それでも十分に女性を死に至らしめるだけの深さはあった。

一通り見渡してみたがそれらしき証拠はない。まあ、桑野があれだけ必死に探し回っていたのだから、証拠があればとっくに見付かっているはずなのだが。

ところでここは見た所、子供部屋のようだ。恐らく桑野に遊んでくれと懇願したあの女の子の部屋だろう。随分とさっぱりした部屋だ。確かに子供の部屋だとは見て分かるし、机の上にあるピンクのランドセルから女の子の部屋なのだという事も分かる。しかしもつと子供らしさあるいは女の子らしさがあってもいいのではないか。人形なんか床に散らばっていて、やりかけの宿題が机の上で散乱している。そんな小学生の女の子ならではの風景がこの部屋にはな

い。まるで何処かのモデルルームに来ているみたいだ。唯一、女の子らしいのはベッドにあるウサギのヌイグルミくらいなものだ。

洪崎は夢を移動してみることにする。今度は女性が殺されてしまふあの場面だ。実際に桑野は殺人が行われる瞬間を見てはいないのだから、捜査に関するあらゆる証言や情報が彼の頭の中で混濁し、夢としてあのような悲惨な光景を生み出してしまったのだろう。しかし彼は数多くの情報を元に殺人の瞬間を頭の中で作り出したのだと考えられる。その殺人の瞬間はまったくその通りではないが、かなり実際に近い殺人の瞬間であると捉えなくてはならない。つまり事件を解決する上で充分に役立つ情報のはずだった。

夢はちょうど女性が犯人を出迎える瞬間から始まっていた。女性は微笑み、影（イコール犯人）に近付いていく。そして女性は何故だか急に身を屈める。腰を折りまるで床に落ちた何かを拾おうとしているようだ。洪崎も同じように腰を落とし、女性の視線を確かめた。やはり女性は下を向いている。カーペットを見てみたが何か落ちていているようではない。それでは何故、女性は下を見ているのか？ 思考を巡らせていると、いきなり目の前にナイフが突き出る。

それは洪崎の目の前であたかも現実のように光り、次の瞬間には女性の首元に突き刺さっていた。

身を硬直させる女性。自分の首に突きたてられたナイフを驚きと恐怖が混ざり合った目で見ている。突き刺さった首元からは血がゆっくりと広がっていく。そして女性は身を屈めた状態のままカーペットへ崩れ落ちる。

ここまで見て分からないことがいくつもあった。一つ、女性は殺される瞬間、何を拾おうとしていたのか。女性の首元を確実に狙うためにつまり確実に息の根を止めるために、犯人はわざと何かを落とし女性に拾わせようとした。その瞬間を犯人は狙ってナイフを突き立てた。充分に考えられるがまだ推測の域を出ていないのは確かだ。

そして二つ目が、何故、女性は子供部屋で殺されたのか。つまり女性は子供部屋で何をしていたのか。子供の帰りを待っていたとも考えられるし、部屋の片付けをしていたとも考えられる。それを知っていたあるいは部屋に入っていく姿を目撃した犯人が女性を殺しに行った。

とにかく桑野の夢だけでは情報が足りない。彼の記憶に入らなくてはならなかった。

時計を見ると夢に入ってから六分三十四秒が経過していた。夢の中でもやはり時は進む。人が眠りに就いている間も時は進むように人が見る夢も同じように進む。夢を見るということは当然ながら現実と一緒に常に進行形であり、止まることもましてや逆戻りすることもない。

少女の部屋を出ると目の前に桑野が立っていた。紺色の背広に赤のネクタイ。額に汗を浮かべその唇は若干だが紫色になっている。血走った目に微かに震える体。怯えているあるいは戸惑っているような様子だった。無理もなかった。自分がいつも見ている夢の中に自分が入っているのだから。それは例えるなら自分の体の中を自分の手でかき回し、中にある肝臓や胃や腸を取り出すかのような気持ちの悪さ。そしてそれはレントゲンに写った自身の骨を見るかのような違和感と不思議な気持ちにも似ている。

「高校の頃、柔道をやっていた」

桑野は乾いた唇を舌で濡らし、唾を一つ飲み込んでからそう言った。それはからからに乾いた雑巾を無理矢理絞り上げ、なんとか一滴の水を落としたかのような声だった。

「練習中に何度か受身に失敗して脳震盪を起こしたことがある。今、その時のなんとも言えない頭の痛みと、ふらつきに似た感覚があるんだ。そう、たとえるならこれは……」

「夢の中にいるよう」

洪崎は指をぱちんと桑野の目の前で鳴らし、そう挟んだ。

「まさしくここは夢の中だ。どうだ？ 心地良いだろ？」

「心地良いわけがない。早く夢を取り除いてくれ」

「ああ、私も早く終わらせたい。そのために今から君の記憶を探る。君も一緒に着いて来てもらいたい。心配しなくても大丈夫だ、夢と記憶を連動させて、事件に関する記憶だけを探るようにする」

そして次の瞬間に場面は一転し、二人は別の部屋に立っていた。

桑野はしばらく周りを見渡してから覚えのあるその風景にしばし驚きの表情をした後、事件の記憶を鮮明に思い出してしまったのか非常に具合が悪そうに指で眉間を強く押さえた。あるいは記憶を探ったせいで多少の息苦しさを感じているのかもしれない。

どうやらここはダイニングキッチンようだった。四人用のテーブルが部屋の中央にある。レースのテーブルクロスが引かれ、その上に花を活けた花瓶が置いてある。活けてあるのが何の種類の花なのか渋谷には分からなかったが、とても綺麗な色だと思った。造花ではないかと思うほど鮮やかな黄色だ。

テーブルには椅子が四つ。綺麗に整理されたシンクには水垢どころか、使った形跡すらない。しかしフックに下がったフライパンはわずかに汚れていたし、その横に下がっているフライ返しも焦げた後つまり使った形跡がある。水道の蛇口はしっかりと閉められている。捻ってみようとしたが、水一滴落としてはならないといったように随分と強く閉まっていた。

椅子に腰掛ける者が四人。一人はあの少女。一人は桑野を睨み付けた老婆。薄くなった頭にパーマを当てている。一人は丸眼鏡を掛けた中年の男。四十年代半ばといったところだろうか、頬がこけていて目が大きいその顔はまるで骸骨のようだった。一人は黒髪をポニーテールに結んだ若い女。歳は二十代後半。美しくはないが、それなりの容姿をしている。二重で綺麗な瞳をしているのに、その下にまるでうじ虫が侵食しているかのような大きな隈がある。そのせいで綺麗な瞳は台無しになっている。うつむいているせいもあるのだろうか、まるで広い草原にぽっかりと空いた暗い穴のように特徴的だった。あるいはその隈さえなければ随分と男にもてるかもしれない。

薄いピンクのエプロンを羽織、その下に黄色のセーターを着ている。「こいつらが容疑者ということだな？」

洪崎が桑野にそう質問すると、しばしの沈黙があつてから「ああ」と返ってくる。

「男は殺された女の夫。少女はその二人の子供。老婆の方は夫か妻の母親だろう。分からないのがこの若い女だ」

洪崎はそう言いながら若い女の顔を覗き込む。よくよく見てもやはり隈が非常に目立つ。そして唇は若干紫色をしている。全体的にとても健康とは言えない顔だ。

「そいつは家政婦としてこの家に雇われているんだ」

「なるほど。それでは事件の概要を説明してくれないか。君の記憶から引つ張り出すよりも君自身から聞いたほうが早い」

「なあ、本当にこの事件を解決できるのか？」

「もちろんだ。夢の中で私に不可能は無い」

「さつきも言ったが私、いや警察が必死になつて捜査しても何の証拠も見付からなかった事件なんだぞ？ それをあなた一人の力でどうこうできると思っているのか？」

洪崎は桑野を睨み付け、人差し指を突き立てる。その突き立つ指を桑野へと向ける。

「また同じことを言わせる気か？ 夢の中において私という存在は神そのものといつていい。つまり今この瞬間、私に不可能なことはない、いや、不可能という言葉自体が夢の中において相応しいものではない。とにかくそこまで信用がないのなら、ここで中断してもいいのだぞ？ それに君は私のことを疑っていたが、実際こうやって夢の中へきているじゃないか。ここまできて今更そんなくだらんことを言われても困る。なあ、私を信用していいとは思わないか」

桑野は返す言葉が見付からず「すまなかつた。君の好きなようにやってくれ」と言った。

「分かればよろしい。さあ、事件について話してくれ。ああ、言つとくが余計なことは話さないでくれ。簡潔に頼む。なにせ時間がな

い
「

「 洪崎がそう言つと桑野は容疑者達を一人ずつまるで今から取調べ
するみたいに見回した後、ゆっくりとやはり枯れた声で話し出した。

ある元刑事の悪夢 4

「事件が起きたのは六年前の七月だった。まだ夏はこれからだというのに、やけに蒸し暑くてイライラしていたのを覚えている。殺されたのはこの家に住む笹野啓子。二階にある啓子の娘、沙織の部屋で死体となって発見される。見たとは思いが、首をナイフで一突きにされている。争った形跡はなかった。ただ膝が少しだけ折れ曲がった状態で倒れていたため、殺される直前まで身を屈めていたと思われる。何か探し物をしていたのか、あるいは何かを拾おうとしていたのかは分からないが、犯人は下を向いている無防備な被疑者をナイフで突き刺したんだ。」

桑野はそこで息を一つ吐く。思い出したくない事件の記憶を自分の記憶の中で喋っているというなんとも奇妙な感覚。頭のとっぺんをくり抜かれて、手で脳みそをぐりぐりと押さえつけられているかのような気分だった。

「最初に死体を発見したのは？」

「洪埼が先を促す。桑野が苦しんでいる様子を横目で見ながら、自分分は涼しい顔でテーブルの上へ腰掛けている。」

「家政婦の女だ。清水洋子。キッチンで晩御飯の支度をしていたら、二階の部屋で何か倒れる音がしたので様子を見に行ったらとところ、死体を発見した。慌てて一階で仕事をしていた夫、笹野浩太を呼びに行った。そして清水は警察と救急車の手配をするため電話があるキッチンへ向かい、夫の浩太は二階へ行く。浩太が二階へ行くのと同じ頃に当時、小学一年生だった娘の沙織が学校から帰って来る。異変を察知した沙織は父親の浩太と一緒に二階へ上がるうとするが、もちろん浩太はそれを止めた。ここで浩太の母親、静代が駆けつけたので、沙織を静代に任せて自分は二階へと上がった。」

「その静代はずっと何をしていたんだ？」

「庭の方で花に水をやっていたそうだ。妙に騒がしいので何事かと

思つて様子を見にきたらしい」

「父親は？」

「家政婦が呼びに来るまで、一階にある書齋にこもつて会議で使う書類をまとめていたそうだ」

洪崎は天井を仰ぎながら桑野の話を聞き、時折質問をした。それはたいていしばらく話を聞いていればそのうち出てくるような内容ばかりの質問だった。よほど時間が無いのか、洪崎は先へ先へと話を持っていくこうとする。どうしてそんなに急ぐのかと桑野は問いたかったが、余計な事を喋ると怒り出しそうなのでやめた。

「笹野啓子は、なんで子供部屋で殺されたんだ？」

「子供の帰りを待つていたらしい。その日はちょうどテストの答案が返ってくるので、早く点数を見たかつたのだろう。テストが返ってくる日はいつも子供部屋で子供、沙織の帰りを待つていたそうだ。啓子は教育熱心だつたらしく、習い事はもちろん家庭教師も沙織につけていた。一切の娯楽は許さず、ただひたすらに勉強だけをさせていた」

どつりで子供らしさのない部屋だと洪崎は思った。ゲームはもちろんのこと、人形で遊ぶことも漫画を読むことも許されなかつたのだろう。少しだけ沙織という子供が可哀想に思った。

洪崎は椅子に腰掛けた幼い少女を見る。母親にとても似ている。特に目元がそっくりで、まるでそのまま母親のものをコピーしたのではないかと思うほどだ。まだ小学校に上がったばかりなのだろうが、とても整つた美しい顔だ。

「そんな生活、子供は息が詰まるな」

洪崎が言った。「何もこんなに小さい頃から勉強を熱心にやらせなくてもいいとは思ふが。それよりも、とても綺麗な顔をしているから、どこかの芸能事務所に入れたほうがいいんじゃないか」

「やらされている本人はさほど苦ではなかつたようだったな。取調べの時も勉強が大好きと言つていたし、母親が死んだからもう習い事はできなくなるかもと泣いていたからな。世の中にはそういう変

わった子供もいるんだ。実際かなり頭は良かったようだ。母親に見せるつもりだったテストの答案もなかなかいい点数だったし、他の答案も見せてもらったが、どれも百点ばかりで驚いた」

「夫はどこかの社長か？」

「社長ではない。それよりは少し地位の低い役職だ。まあいずれは社長になるのだろうが、それでもなかなかの財産家だ。聞いての通り、子供を数々の習い事に通わせる金もあつたし、家政婦を雇う金もあつた。車は仕事用と家庭用にそれぞれ一台ずつ。その他に夫のコレクションとして数台持っている車もある。もちろん乗ることはない。家はそんなに大きくないのにガレージだけはやたらとばかりかかったのを覚えてるよ。金が有り余つて困つてますといった感じだつたな」

「凶器は何処にあつた物だ？」

「一階のキッチンにあつた物だ。ガスコンロの下の引き出しに仕舞つてあつたものだ。もちろん誰でも出し入れは出来る」

「部屋は密室だつたのか？」

少し間がある。桑野は言いたくないのか餌を求めて水面に浮かぶ金魚のように口を開けたり閉めたりしていた。まるで自分の墓まで持つて行きたい秘密を大勢の前で話さなければならぬといった深刻な顔。

「密室だつたんだな？」

洪崎がもう一度同じ質問をすると桑野はゆっくりと頷きながら「ああ。部屋には鍵が掛かつていたそう。部屋の鍵を持っているのは殺された啓子と家政婦の清水だけだった。とは言え、窓は開いていたそうだが」と言った。

「おい、お前」

洪崎が鋭い声を上げる。

「きちんと事件の話をしる。確かに簡潔に話をしるとはいつたが、大事な部分を抜かしてもらっちゃ困る。お前、本当に夢を取り払いたいのか？」

「もちろんだ。ただ、なんとというか、密室だということを書いてしまえば、そこで何もかもが分からないまま終わってしまったのではないかと思って。言わなかったんじゃないんだ、ただ話そうとした瞬間に頭の中でその事実だけがどこか違う場所へ飛ばされたように無くなっていったんだ」

「まあ、いい。それでは、家政婦が死体を発見するまでの過程が変わってくるな」

「ああ。二階の部屋で何か倒れる音を聞いた家政婦は、様子を見に二階へと上がった。これも言っていなかったが、二階といってもあるのは子供部屋が一つと、トイレ、あとは物置部屋と空き部屋なんだ。家政婦は最初に物置部屋を確認した。何かが倒れた様子はなかった。空き部屋の方は滅多に誰も入らなかったし、普段は鍵が掛かっているからまさかここで音はしていないだろうと、その空き部屋は確認しなかった。残った子供部屋をノックしてみた。家政婦は啓子が娘の帰りを待っていることを知っていたからな。そしてノブを回してみたが開かなかった。声を掛けてみたが返事はない。それを繰り返しているうちになにかおかしいと思った家政婦は持っていた鍵を使って部屋を開けた。そこで死体を発見し、慌てて夫の浩太を呼びに言った。ちなみにもう一つの鍵は母親のつまり死体のポケットに入っていた」

桑野は一気にそう喋ると、首に巻かれた赤のネクタイを少しだけ緩めた。夢の中というのはこういう所なのだろうか、妙に息苦しい。それに我慢できないほどではないのだが蒸し暑い。首元と脇の下に微量の汗が滲み出ている。

「ところでこの女、足に怪我をしているな」

洪崎はそう言いながら家政婦の女、清水洋子の足元を指差す。椅子から伸びたその足の先端、指の部分が包帯で覆われている。人差し指、中指、薬指の三本が包帯によって一箇所に集められ、何重にも巻かれている。

「洗い物をしているときに誤って食器を落としてしまったらしい」

桑野も家政婦の足先を見ている。

「それはいつのことだ？」

「洪崎がそう尋ねると桑野はやはり家政婦の足先を見たまま「事件が起きるほんの前のことだったそうだ」と言った。

ここで沈黙。テーブルに座る笹野家の人々は皆、虚ろな目をしていいる。それはなんの感情も持たない蠟人形を思わせた。

「もちろん最初にこの家政婦を疑ったよな？」

それからしばらくして洪崎はそう桑野に尋ねた。ゆっくりと頷く桑野。頷いた時、首筋が軋み声を上げた。痛みを感じたので音が鳴った首筋をゆつくりと揉んだ。そしてたとえ夢の中でも痛みは感じるものなんだと思った。そういうえば暑さも感じている。

「ああ、疑ったどころか私は家政婦を重要参考人として署まで連れていったよ。しかし証拠不十分ですぐに釈放された。家政婦が怪しいとあらゆる物事がそう言っているのに、それを裏付けるものがないかったんだ」桑野は言った。

「凶器は家政婦がいたキッチンにあり、閉まっていた子供部屋の鍵は家政婦が持つていて、最初に死体を発見したのは家政婦であり、足に怪我をしている。殺された啓子が身を屈めていた理由も説明がつく。怪我をしている家政婦の足を見るために目を近づけようとすれば、おのずとああいう体制になる」洪崎は確かめるように言った。そして洪崎はテーブルから立ち上がり大きな伸びをする。それから腰を左右に振り、屈伸をする。まるでこれから激しい運動をするかのように、それは随分と丁寧に行われた。

洪崎は桑野よりはまだ若いから、軋む音はどこを動かしても聞こえてこない。関節は正確に曲がり、腰はしっかりと上半身を支えている。その代わりに洪崎の口からきつそうな声が漏れる。

「しかしこの事件はそんな簡単なものではなかった」

洪崎がそう言うつと桑野はしばらく宙を仰いだ後、まるで誰かに無理矢理そうさせられているかのように、ぎこちない様子で首をまた縦に振った。

「その空き部屋が気になるな。見てみたい」

洪崎がそついい終わらないうちに場面は一転する。そこは窓があるだけの随分と殺風景な場所だった。

「この家は生活感のない部屋ばかりだな」

「ああ、なにせ殺された啓子がかんりの綺麗好きだったらしく、常に部屋は片付いていないと気がすまない性格だったらしい。汚れはもちろんのこと整理整頓は常にしてあり埃一つあつただけでも大騒ぎしていたようだ。清水もよく啓子に呼び出されてここが汚いとか、ここをもつと掃除しろ、だとかを言われうんざりしていたそうだ。その異常なまでのこだわりは家族の者も付いていけないほどだった」

「なるほど。家政婦の女は動機も充分だったというわけか」

「ああ」

余計な物が何も無い子供部屋。まるで使った跡がないキツチン。言われてみればどの部屋も完璧なまでに片付いていた。それは啓子によるものだったのだ。

「家政婦の女はかなり気が弱い性格で、啓子があまりにも毎日うるさく言うものだから随分と怯えていたようだ。そんな家政婦の清水を夫の浩太はかばっていたりしていたようだ。これは静代から聞いたんだが」桑野がそう言うと洪崎は「もしかすると夫の浩太と家政婦は密かに出来ていたのかもな。それを妻に悟られたので殺すことにした」と言ったのだが、どうもしっくりこないようで、その考えを振り払うかのように頭を拳で三度軽く殴った。

ある元刑事の悪夢 5

また場面は一転し、今度は夫の書斎に二人は立っていた。

桑野はあまりにも唐突に場所が変わるものだから、目をきよるきよるさせ、落ち着きの無い子供のように体を左右に揺らしていた。まるで大きな箱の中に入れられてぐるぐると回されているかのような感覚だった。

今までの部屋とは違って、夫の書斎はわりといろいろな物が混雑していて、それは洪崎に始めてこの家には本当に人が住んでいるのだと認識させた。

大人二人が横に並んで両手を広げたくらいの大きなディスクがあり、その上には辞書だったり書類だったり本だったり乱雑に置かれている。吸殻が山盛りになった灰皿もある。ディスクの真ん中にはパソコンが置いてある。床にもディスクに置ききらなかつた書類や本が所狭と置いてある。そのなんの脈絡もなく置かれた本の山が桑野のいた古本屋を連想させた。

ディスクの後ろには窓があり、ベージュ色のカーテンが掛かっている。

「ここは散らかっているんだな」

部屋を見回しながら洪崎が言った。桑野も同じように部屋を見回しながら応える。

「この部屋は夫の浩太だけが使っていたからな。それに仕事場としても使っていたらしいから、啓子はあまりうるさく言わなかったのだろっ」

洪崎は何を思ったのか窓の方へ歩み寄りカーテンを引いた。部屋の中に光りが差し込む。その光りはまるで現実への誘いであるかのように洪崎、桑野の目を刺激する。洪崎は窓を開けて空を見上げる。ちよつと真上に子供部屋の窓が見えた。

「もちろんその可能性も考えた」

そう言った桑野の声は、渋埼の考えを読み取ったかのように落ちて着いていた。

「啓子を殺して子供部屋の窓から飛び降りて、この書斎の窓から入る。さほど高くはないから飛び降りても問題はない。まあ、下手すれば捻挫くらいはするだろうが。そしてそんなことが出来るのは夫の浩太しかいない。しかしこれも証拠がない。あくまでそれは可能性でしかなかった」

渋埼は唸り声を小さく漏らし腕組みをした。それは考えるためというよりも、お手上げといった様子に見えた。

「ほら、だから言ったんだ。この事件は簡単なものではないと」

さげすむような表情で桑野はそう言うと、腕組みをしたまま動こうとしない渋埼に向かって何度か咳払いをした。もういいから早く夢から出してくれという意味だろう。しかし渋埼はそんな桑野の様子に気付いているのかいないのか、やはり腕組みをしたまま天井を見上げ思考を巡らせていた。

「そんなところで考えても何も出てこないと思うぞ」

渋埼がいつまでも動こうとしないので、いいかげんうんざりしてきた桑野はそう言った。やはり自分の悪夢は消えないのだ。一生この悪夢に悩まされなければならぬのだ。落胆はなかった。あるのは最初から期待などせず、さっさとこの目の前の男を店から追い出しておけばよかったという後悔だけ。それだけだった。

そしてもう何度目か分からない場面転換がある。場所は先程のダイニングキッチン。四人の笹野家の人間。やはりその目は誰もが虚ろ。しかしその中に何かに怯えるかのような恐怖が含まれているのが分かる。それはこの中に、もしかしたら啓子を殺した犯人がいるのではないかという怯えと恐怖そして混乱だった。

「まだ続ける気か？」

桑野がそう尋ねると渋埼は当然といった様子で言った。

「もちろんだ。私に任せておけば悪夢を見ることも悩まされることもなくなる。しかし君が私を信用していないのも分かるぞ。私はま

だ君の期待に応えられていないし、それどころかこれといった糸口も見つけていない。ただ場所を移動し質問し、ある程度の予測をしてはみるが全て否定され、最終的には腕を組んで何もしなくなった。あるいは最初から期待などしていなかったのか、期待はしていなかったがとりあえず取り払ってもらえるのなら任せるだけ任せようと思っただのか、それは分からないが」

桑野は何の返事もしない。洪崎は続ける。

「しかし私がやっていることは大事なことなのだ。たとえそれが後から思い返せば無駄なことだったとしてもだ。何故だか分かるか？ 夢というのはそういうものだからだ。夢というものは人間が作り出す心の廃棄物と言ってもいい。やましいことや腹の立つことあるいは傷付いたことがあればそれは心の中で真つ黒な、見るからに邪悪な塊となる。それは廃棄物として外へ吐き出さなくてはならない。それではどうやって吐き出すか？ ストレス発散という言葉があるだろ？ 心の中の廃棄物を一掃するために人は自然とそして生きるための義務のように趣味や娯楽によってそれを外へと吐きだしているんだよ。それは夢も一緒なんだ。娯楽や趣味ではどうにも処理し切れなかった廃棄物は、今度は体が勝手に処理してくれるようになる。夢を見せることによつて、それを外へと吐き出す。分かるか？ つまり君が悩まされ続けているこの夢は、普段ではどうしようもない邪悪の塊を体が夢を見せることによつて吐き出そうとしているんだ。しかし君の場合それはあまりにも大きく果てのない作業なんだ。そこで私が吐き出す塊をもっと小さくしてやるうとしているのだ。つまり私が行っていることは決して意味のないことでも無駄なことでもない。君は気付いてはいないだろうが、私が何か行動をする度に廃棄物はどんどん小さくなっている」

そこで洪崎は少し喋り過ぎたことに気付き、慌てて時計を見た。短くそして苛立ちのこもった舌打ちを一つ。そして別に言わなくてもいいことをわざわざ言ってしまった自分に怒りを覚えた。しかしこうやっている間も時間は過ぎていくばかりで、眉間に皺を寄せ、

そして思考を切り替えるつもりで、テーブルの周りに腰掛ける四人の容疑者達を見た。

「この母親の静代はずっと庭にいたのか？」

桑野は最初それが自分に問われた言葉だと思わず、ましてや急に話が変わったのでしばらく黙ったままでいたが、ここには渋谷と自分しかいないのだということに気付くと、少し慌てた様子で「ああ、庭にいたようだ」と返した。

「家政婦の目を盗んで二階の啓子がいる部屋に行き、先程のように窓から飛び降りて部屋を出て、まあこの場合、高齢だからかなりのリスクがあるし、うまく降り立ったとしてもすぐ側の部屋にいた浩太に気付かれるかもしれないが、そのまま何事もなかったかのよう

に庭に戻ることもできたわけだ」

渋谷がそう言うのと桑野は濁った表情のまま返す。

「また落胆するかもしれないが、その可能性ももちろん考えた。しかしやはりと言うべきか、これも証拠がない」

「落胆はしていないよ。そう返ってくるのは分かっていた。しかしどうしても理解できないことがある。これだけ証拠を残さない犯人だ。あるいは上手くやれば外部犯の仕業にすることも出来た。しかしあえてと言うべきなのか、そこに意図があるとするのなら何のためなのか、わざわざ家の中にあつたナイフを使いわざわざ密室にして、まるで内部の犯行だと犯人がそう言っているみたいだ。いや、もしかすると犯人はそう言いたいのもかもしれない」

「何故？」

「我々に何かを伝えようとしているのかもしれない。しかしそれが何なのか分からない」

渋谷は四人の容疑者を改めて眺め、顎に手をやり唸るような声を上げたかと思うと、今度はテーブルの周りをぐるぐると周りはじめた。

桑野はくるくると周る渋谷を目で追い掛けてはいたが、何も声を掛けなかったし、先程のように早く夢から出してくれという催促もし

なかった。短い時間ではあるが彼、渋埼と話したり行動を共にしたりしてみて、彼には鋭い観察力と推理力があり、もしかするとほつれた糸を解くようにあるいは放られた数式を暗算で解くように、意図も簡単にこの事件を解決してくれるかもしれないと桑野は思っていた。それは期待ではなく確信だった。このありえない状況で自分は頭がおかしくなっているのかもしれないし、精神に少なからずの障害が出ているのかもしれないが、それでも渋埼に託してみよう、彼に託せば全てが上手くいくという自信があったのだ。

「ここで問題点を整理しよう。問題といってもあまり難しく考えれば駄目だ。頭に浮かんだ言葉を自然と口に出すような、そんな簡単な問題点だ」

渋埼は動きを止めそう言った。

「まず一つ。犯人は啓子を殺した後どうやって部屋から出たのか。

(この場合、部屋に鍵が掛かっていたという家政婦の証言を信じたうえで疑問になる)そして二つ目が、犯人は何故こうも分かりやすく内部犯の仕業に見せているのか。かといって外部犯が内部犯に見せかけたとも思えない。それにまだある。いくらそれぞれが別のことをやっていたとはいえ、誰にも気付かれず啓子を殺すことは本当に可能なのだろうか。それに物音を聞いた家政婦が部屋に入ってくるまでそう長い時間はなかったはずだ。そんな短時間で部屋から脱出できたのだろうか」

その渋埼の意見も桑野はやはり黙って聞いていた。渋埼が今言っていることは、もちろん自分も考えた。あらゆる疑問点がまるで落下の予測がつかない隕石のように次から次へと降りかかり、精神に衝撃的なダメージを与える。桑野はそのダメージを存分に味わい、そして屈辱を感じたまま刑事から身を引いたのだ。それは自分の刑事生活いや人生そのものを否定されたような気分だった。それが現在もこうして悪夢として桑野の身を蝕み、悩ませていた。

「君の意見を聞かせてほしい」

頭を抱えていた渋埼が桑野の方を見て言う。

「君が今言ったことは我々も考えた。あらゆる証言がこの事件をより複雑にし、それは奥深さでもあり、その奥深さは底の見えないもしかすると底なしのものにしているのかもしれない。しかし私も改めて事件を振り返ってみたが、君の言ったとおり、これは他の者の目を盗んでできるようなことじゃない。あるいは共犯という可能性もある。先程も言ったようにそんなに広くはない家だから、誰かが目立った行動をすれば必ず他の誰かが気付くはずなんだ。しかし共犯であれば話は違ってくる。問題は誰と誰が手を取り合っているかということだ」

渋谷は思ったよりも的確な答えが返ってきたので満足したのか、少だけ頬を緩ませ指をパチンと鳴らした。そしてパズルの最後の「ピースをはめた時のような爽快感に満ちた表情をつくった。

「ああ、この事件は共犯の可能性がある。しかし共犯という説は合っているようで合っていないかもな」

「どういうことだ？」

「つまり共犯という言い方はあまりこの場合、相応しくないということだ」

渋谷は何かを悟ったかのようにその鋭い眼を輝かせた。それはまさしく獲物を狙う獣のようだ。

「相応しくない？」

桑野は確かに聞こえた渋谷の言葉をもう一度聞きたくてそう言った。

「ああ。共犯と言えば共犯なのだが、この場合ここにいる全員が犯人と言ったほうがいいだろう。全員が共謀して妻の啓子を殺したんだ」

その渋谷の言葉に桑野はしばらく口を開けたまま、何も喋ることも何かを考えることもできなかった。それはあまりに唐突で衝撃的でうまく桑野の頭が取り入れようとしなかった。いや、実は桑野も少しは考えていたことではあった。しかし、それはあまりにも突拍子な考えだった。だから知らないうちに、頭の中から消し去ってい

た考えだった。

「まさかそんなこと」

「むしろそう考えなければおかしいのだよ。ちなみに分かっているとは思うが、さすがにその全員という中に子供は含まれていないぞ？」

「当たり前だ。あんな小さな子供に母親が殺せるわけがない」

桑野は渋谷の衝撃的で大胆な推理をそのまま鵜呑みにすることはできなかった。しかし冷静に考えてみると、あるいはそうなのかもしれないとも思った。実はしつかりと目にしていたもののだが、それを無理に見ようとしていなかったただけなのかもしれない。誰かが、ちゃんとこれを見るんだと言って桑野の頭をしつかりと持ち、指でその場所を指し示してくれなければ桑野は決して見ようとはしなかった。

ある元刑事の悪夢 6

うまく頭が回らない。足元がおぼつかない。歯ががたがたと震える。呼吸がうまくできず鼻の穴を何度も広げる。目を閉じる。ゆっくりと呼吸を整える。それを何度も繰り返す。乾いた唇に舌を這わせ潤いを与える。

それでどうにか落ち着いた桑野は、渋谷を見たのだが、渋谷はまるで擦りガラス越しに見ているかのようにぼやけていて、それは自分が錯覚しているのか、本当に渋谷がガラス越しにいるのか分からず、徐々に視界が狭まりついにはここが上なのか下なのかあるいは立っているのか座っているのかも分からない状態になった。

「落ち着け。お前が心を乱せばお前の記憶であるこの空間が歪んでしまっ」

遠くから渋谷の声がする。それは桑野の耳の中で反響し、決して忘れてはならない言葉であるかのように脳裏に深く刻まれていく。しっかりとしなくてはと自分に言い聞かすのだが、体は宙を漂ったまま。

気が付くと見覚えのある場所に立っていた。それはあの殺人現場でもダイニングキッチンでもなかった。

ここは……俺の家？

そこには桑野の妻がいた。二人の娘と息子がいた。娘が抱いているのは、二歳になる孫。全員が笑顔でこちらを見ている。それぞれテーブルの前に座りそのテーブルには妻がこしらえた料理が並んでいる。桑野が好きなひじきを絡ませた肉団子もある。息子が席を立ち桑野を促す。さあ、一緒にご飯食べよう。今夜は久し振りに酒でも交わそうじゃないか。

桑野は頷きテーブルに着く。娘が、それじゃあ全員揃ったみたいだから食べましょうかと言うと、いただきますという心に染み渡るそれだけで胸の奥にあるドロドロした憎悪を綺麗に掬い取ってくれる

かのような気持ちのいい声が次から次へと聞こえてくる。孫もまだつたないがいただきますと言っている。桑野も倣っていたきますと言つとおかずに手を伸ばす。おのおのが好きな物を食べ好きなことを喋った。

まるで風が運ぶ春の便りを全身で受け止めるかのようなあたたかな気持ちだった。娘の冗談に桑野も思わず頬を緩めます。息子の手酌を黙って受け取る。孫の頬を撫でてやる。あとで一緒に遊ぼうと誘うと嬉しそうに手を叩いた。

「現実逃避したか……」

背後から声がする。その声は桑野の緩んでいた精神を一瞬にして強張らせた。振り向きたくないしかし振り向かなければならない。そんな葛藤をする桑野に背後からの声。

「よくあることだ。受け入れたくないあるいは信じたくない事実を知った人間は、自分の一番落ち着く場所、空間に逃げようとする。君の場合これは家族みたいだな？」

振り向くとこの温かい空間にはまるで場違いな全身真っ黒な男が立っていた。そしてその人物が渋谷だと分かった瞬間、今までそこにいた家族が波にさらわれる砂山のように足元からゆっくりと消えていく。慌てて妻を、息子を、娘を、孫を抱き寄せようとしたが、感じるはずの肌の温もりがなく、それどころか雲を掴むかのようになんの手応えもなく、そして家族全員が桑野の手の中で消えていった。

「家族を何処へやった？」

立ち上がり渋谷に吠える。しかし渋谷は涼しい顔で、肩をすくめている。

「別に何処へもやっていないよ。ここは君の記憶の中なんだから、むしろ自分自身に尋ねてみてはどうかね？ まあ、そんなことはどうでもいい。早く元の場所へ戻るぞ」

状況が飲み込めない桑野はやはり怒りを露にしたまま「一体これはどうなっているんだ？」と言った。

「だから言っただろ？ 君は私の推理に驚いて思わずあの場所から逃げてしまったんだ。大丈夫、誰にでもあることだ」

「私は決して逃げてなどいない。ただあまりにも突拍子のない推理に戸惑っただけだ。それなのに……」

「だから誰にでもあることだと言っているだろ。人は恐怖を感じた時、鳥肌が立ったり息を呑んだりあるいは足がすくんだりする。それと同じことだ。自然現象と言っているかもしれない。さあ、早く戻るぞ。さっきのダイニングキッチンを思い浮かべてくれ」

目の前で家族が煙のように消えたことに桑野はまだショックを受けていた。これは現実ではないのだ、実際に私の家族は傷一つ負ってはいないと自分に言い聞かすのだが、それでも本当にいなくなってしまうたかのような喪失感が体中を支配し、どうにも落ち着かない気分だった。しかし洪崎が催促の目をこちらに向けているので、領かないわけにはいかず、目を閉じ先程の場所を思い浮かべる。

「今度は落ち着いて聞いてくれよ」

洪崎の声があったので目を開けると、元のダイニングキッチンに戻っていた。そこにはやはり冷え切った台所がありテーブルがあり、それら以上に容疑者達の冷めた表情がある。

「混乱されると私はどうにもできなくなるからな。いいか？」

洪崎がそう言うと、少しの間を置いてから桑野が頷く。

「よし。それでは続きを話そう。夫の浩太、その母親、そして家政婦の三人が共謀して啓子を殺したんだ。子供のテストが返ってくる日に啓子が子供部屋に行くことを知っていた三人はそこを狙った。直接殺したのは家政婦の清水だろうな。足の指に包帯を巻いて、啓子がいる子供部屋に向かう。啓子が足に気を取られている隙を狙ってナイフをつき立てる。その後、恐らくは外部から誰かが侵入して（物取りにでも見せかけるつもりだったのか）啓子を殺したことにするつもりだったんだろう。家にたまたま啓子しかいなかったことにしてな。しかし、ここで問題が起きた。啓子を殺してさあこれからが本番だと思った矢先に、思いのほか娘の沙織が早く帰宅してし

まった。早くテストを母親に見せようと駆け足で帰って来たのか、そのせいで全ての段取りがめちゃくちゃになってしまった。玄関に立つ娘を見た三人の心境は凄まじいものだったんじゃないか、頭が文字通り真っ白になったに違いない。そしてまさかまだ幼い娘に自分達が殺したと言えるはずもなく、仕方なしに急遽計画を変更した。即興で口車を合わせたせたらんだろうか」

桑野は怒りとも取れる虚脱とも取れるなんと複雑な表情で渋谷の話しを聞いていた。また混乱してしまわぬよう注意しながら彼の言葉を聞いているのだが、今にも精神のたかが外れて今度は目の前の空間が歪むどころか、消滅してしまうのではないかと思つた。

「どうだ私の推理は？ 当たっているとは思わないか？」

満足そうに渋谷は、それでもやはり時間を気にしている。腕時計に目をやりながら桑野の同意を得ようと「当たっているだろうか？」と何度も聞き、桑野が応えないでいるとイライラしながら秒針を指でなぞっていく。

「証拠はないんだろ？」

桑野がそう尋ねると渋谷は目を時計から桑野に移し「そんなものはいらぬ」

「いらぬ？ 証拠がなければどうしようもないじゃないか。それではお前の言つたことはただの空想でしかない」

「私は刑事でもなければ探偵でもない。そして今、私達が向き合っているのは現実起きてはいたが、すっかり埃を被ってしまった事件なんだ。君の本屋にあるあの古本のように誰の目にもふれないそれでも埃だけは積もっていくようなそんな事件だ。私が目的としているのはそんな未解決の事件を解決することではなく、君の満足を得られるかどうか、そして私が夢というものを処刑できるかどうかなんだ。君がこれですつきりしてくれば私も仕事が終えられる。しかしそのように現実と夢とをごちゃ混ぜにしてもらつては困る。

この夢の世界では証拠なんて物は必要ない。そんなに欲しければ君が想像して作ればいい。なんせ夢なんだからそんなこと簡単にでき

る。しかし言っておくが私の推理は正しいぞ。ただ君が言う証拠という物がないだけ。ただそれだけのことだ」

「満足などできるわけがない。それでは何故わざわざ子供部屋で殺す必要があったのだ。共謀してやるならいくらでもチャンスはあつたはずなんだ。なにも子供部屋に行くまで待つていなくてもいいだろ」

声を荒げる桑野。その顔はかつての刑事の頃に戻りつつあつた。

桑野の目は悪を見逃さない鋭い（まるで渋埼の目のような）ものになり、顔には触れれば破裂するのではないかと思うほど血管が浮かび上がっている。その血管を伝つて汗がゆっくりと流れていく。

「その堅苦しい考え方、夢の中ではやめてくれるか？ 言っちゃ悪いがそんな性格だからいつまでも同じ悪夢を見続けるんだぞ。いいか？ 頭をからっぽにするんだ。何も考えるな、何かを突き詰めようとするな、何かにこだわらな。それが君の悪夢を取り払う一番の方法なんだ。子供部屋で殺したのはいろいろとその後の作業に都合がよかつたんだよ。特に意味は無い。ほらこれで満足か？」

渋埼は肩をすくめながらそう言った。

桑野は後悔していた。渋埼の鋭さを見込んでいたのだが、どうも見当違いだつたようだ。確かに的を射ていたかもしれない渋埼の推理は、だんだんと雑なものになり最後には自分が納得してすっきりすることで全て丸く収まると言い出した。怒りを通り越して呆れ返つてしまふそうだ。

桑野はもう何も言い返すことはしなくなり、ただ露骨に不満の滲んだ顔で渋埼を見ていた。

しかし渋埼はそんな桑野の表情など気にも止めず、満足気に口笛を吹きつつ煙草を取り出しそれを吸つた。そして腕時計を見る。

「納得したなら、そろそろ悪夢の除去に入るぞ」

渋埼は煙草をくわえたままそう言った。それでも納得した表情を作らない桑野を見て溜め息と一緒に煙草の煙を吐き、「無理に納得するんだよ。そうしなければ一生苦しみ続けるのは自分だぞ？ 君

が納得するかあるいは気持ちをしつきりさせてくれなければ夢は取り払えない。これまでの私の苦勞が無駄になってしまつたんだ」

「長年刑事として苦勞してきた私をこの事件は屈辱し、あざ笑つた。簡単に忘れるわけがないだろ」

「なにも忘れるとは言っていない。君の記憶を抹消するわけじゃないんだからな。君の夢を抹消するだけなんだ。なあもつと楽に考えなくてくれ。悪夢を取り払つきっかけだと思つてくれればいい。そのことについていえば、君を侮辱したりあざ笑うということにはならないだろ？ 君の生き方を否定しようとも思わんし、さげすむつもりもない。むしろ君を救つてやりたいがこそこのことなんだ。分かつてくれ」

洪崎は必死だった。終了の時間までもう何分もない。ここで彼が納得しなければ諦めてこの夢から出て行つてしまおうと思つた。その後、彼がどうなるかと再び悪夢に悩まされようと知つたことではないし、だからといって自分が罪悪感を持つこともない。私は最大限の努力と最善を依頼人に尽くした。しかし今回はうまくいかなかった。ただそれだけのことだ。失敗したのではない。ただ彼、桑野との話し合いがこじれてしまいうまくいかなかっただけなのだ。しかし桑野は少しだけ考えてから、ゆつくりと「分かつた」と言つた。

「確かに私は深く考えすぎていたようだ。久しぶりに現場をこの目で見て、刑事の頃の気持ちに戻つてきていただけなのかもしれない。なにも今更この事件を解決しようなどとは思つてはいないんだ。むしろ君には感謝しなくてはならん。こんな老いぼれが見る夢なんかに付き合つてくれたのだからな」

「それが私の仕事だ。そして私のやるべきことでもあるのだ」

「ああ、そうだったな。さあこの夢いや悪夢を取り払つてくれ」

その言葉を聞いた洪崎は頷くとテーブルの上で煙草をもみ消し、首を何度か振つて、屈伸と背伸びを二回ずつやつて、それから夢の中に入った時と同様に、桑野の額に自分の人差し指を乗せた。

「それでは君の夢を処刑する。全ての夢を取り払ってかまわないな？」

「ああ、全て無くしてくれ」

「分かった。それでは目を閉じ何度か深呼吸をしてくれ。次に目を開ける時、君は現実の世界へと戻っているはずだ。それと同時に悪夢も、もう二度と見なくなっている。今夜からゆっくりとした夜を過ごせるぞ」

「本当に見なくなるんだな？」

「もちろんだ。ただ君の事件に対する執念が再び燃え上がったりしてしまえば、それが蓄積されまた見てしまうとも限らん。その時はまた取り払うしかないのだが」

「いや、もう事件のことは思い出さないことにするよ。君が記憶も処刑できるんだったらどれだけいいだろうとさえ思っている。私には可愛い孫がいて好きだった古本屋で働いているという幸せもある。それだけで充分だ」

ある元刑事の悪夢 7

そして目を閉じようとした桑野だったが、半ばほどで瞼を持ち上げ、「ちよつと最後に現場を見ておきたいのだが」と言った。

「現場？ 何を今更。もう無駄な詮索などせんぞ」

「ああ、分かつてる。ただもう二度と見れなくなるのがなんだか惜しいような気がして。最後にもう一度だけいいだろ？」

渋い顔をした渋埼だったが、それでも桑野がしつこく懇願してくるので仕方なく応じることにする。

場面は子供部屋。死体はやはりそこにあり、家具もベッドもちろんなそのまま。それらを一つ一つ丁寧に眺めていく桑野。開け放たれた窓から外を眺め、机の引き出しを開け中の物を取り出し眺め、筆筒を開け、ベッドのシーツをなぞり、そして最後に死体に目を向ける。そして夢の中でそうしたいように四つん這いになり床をじつくりと眺める。

その様子を呆れながら見ていた渋埼は、ふと勉強机の上にあるものに気を止めた。それは桑野が机の引き出しから取り出し眺めてそのままにしていた数枚の紙切れだった。沙織の学校での答案用紙だった。桑野が言った通りどれも満点ばかりだった。しかしその中に一枚だけ九十八点と記されたテストがあった。よく見ると国語のテストらしく漢字の送り仮名の間違いでペケになっているところがあった。そして渋埼はある重大な事実に突き当たる。

「おい、啓子が殺されたのは何月何日だったか覚えてるか？」

渋埼は声を荒上げそう尋ねる。

渋埼の頭の中で桑野の言葉が蘇る。

『母親に見せるつもりだったテストの答案もなかない点数だったし、他の答案も見せてもらったが、どれも百点ばかりで驚いた』
母親に見せるはずだったテストは確かにいい点数だったのだが、満点ではなかったのだ。だから桑野はあのような言い方をした。

空気を切り裂くような洪崎の声に桑野は一瞬体を強張らせたが「たしか七月四日だったな。それがどうかしたのか？」と返した。

「もしかしてこの九十八点と書かれたテストは、啓子に見せるつもりだったテストではないのか？」

「ああ、それだな。おいどうしたんだ？」

洪崎はそのテストを桑野に手渡す。渡されたテスト用紙を見た桑野だったが、意味が分からないといった様子で首を捻る。すかさず洪崎が「日付だ。テストが行われた日とその一番上に書いてあるだろ」と言った。

確かにテストの名前を記入する蘭の上のほうに日付が書かれている。そこには六月十五日と記されていた。

再び桑野の言葉が蘇る。

「啓子はかなり教育熱心だったらしく、習い事はもちろん家庭教師も娘につけていた。一切の娯楽は許さず、ただ勉強だけをさせていたらしい」

テストが行われ、返されるまでに二週間以上も間があるのだ。そんなに問題数の多いテストには見えないし、ましてや小学一年生に出すテストなのだからたかが知れている。桑野も気付いたようだった。そしてまさかそんなことはありえないといった顔になる。

「二週間もテストを返さないわけがない」

洪崎はゆっくりとまるで何か難しい書物を読み上げるように言った。そしてやはり同じ口調で続ける。

「テストは母親に見せる日（つまり母親が殺される日）よりもずっと前に返されていたんだ。いつも満点ばかりのテストがちよっとした凡ミスで九十八点だった。沙織は深く落ち込みそしてどうしようか悩んだはずだ」

「それでも九十八点だぞ？ 決して悪い点数ではない」

「お前も言っていたじゃないか。母親は神経質で教育熱心で。もちろん今回のテストも満点を期待して待っていたはずなんだ。沙織はそのテストをなかなか見せることはできず、しかしそう長くテスト

を見せないと不審に思われる。もしかすると学校に電話をして確認するかもしれない。そして怒られることを恐れた沙織は母親を殺すことを思いつく」

「話が飛躍しすぎだぞ。それだけで殺すなんておかしい。ましてや小学校に上がったばかりの子供なんだ」

「異常なほど綺麗好きな母親だったんだ。教育に対してもそれくらい異常だったと考えてもいいんじゃないか。何事にも神経質でちよつとの汚れも見逃さない母親が、勉強に対しては甘いとは思えない。ちよつとした凡ミスだったのだが、沙織にとってみればそれは重大なミスであり母親にしてみればあり得ないミスなんだ。沙織は母親を殺す前日、キッチンにあるナイフを盗み、そして母親に明日テストが返ってくると言う。テストが返ってくる日は自分の部屋で自分の帰りを待っていると知っていたからな。そして当日。こっそり家に帰って来た沙織は自分の部屋に行く。そして恐らくは……」

空間が歪む。桑野が混乱している。しかし渋崎は話を続ける。

「啓子が身を屈めていたのは、子供の視線になるためだったんだ。子供と話するとき大人は誰もが、そうする。そうやって身を屈めてきたところを沙織は隠し持っていたナイフで首元を突き刺す」

部屋にある全ての物が一体となる。そしてその一体となった物が今度は螺旋状になって桑野の目に映る。もちろん渋崎もその一部となっている。しかし渋崎の声だけはやけに鮮明に届く。足がふらつき立っていらなくなる。すると今度は膝を就いた床がまるで蟻地獄のように大きな穴を作り、吸い込まれそうになる。渋崎に助けると懇願しようとするのだが、声が出ない。声の出し方を忘れてしまったかのように、喉が震えることをしない。歯をこじ開けられそのまま固定されたかのようにだ。

そこでようやく渋崎が近付いてくる気配があつて、手を掴まれる。蟻地獄から引きずり出され、そして耳元で「私の話はまだ終わっていないぞ」とやけに落ち着いた声でそう囁かれる。それは真相に辿

り着いた喜びというよりも、また面倒なものを見つけてしまったという後悔の声だった。

頭を何度か小突かれようやく空間の歪みがなくなった。しかし部屋は一つの物体としてではなく、いくつかの固体が集合したかのような妙な見え方をしている。まだ混乱は完全に解けてはいない。口内がねつとりと粘つき、そのせいで声がつまみ出せない。しかし声を出さなくてはならなかった。

「ちょっと待て。だとしたら部屋には鍵が掛かっていたんだ。どうやってその部屋から抜け出したんだ」

それはうまく声になっっているのかどうか分からなかったが、渋谷には伝わったようですぐに返事がある。

「私もそれを考えていたところだ。君の知恵を借りたいんだ。だから気を確かに持ってくれ」

桑野は何度か頭を振り、込み上げてくる吐き気を抑え、ゆっくりとまるで赤子が始めて一人で立ち上がるように地を両手で触り、そこに何の歪みも空間もないことを確認した。鼻を使って息を吸い、その吸い込んだ空気を口から吐き出す。その桑野の行動が合図であったかのように、部屋が元の状態に戻る。

ようやく落ち着きを取り戻した桑野は、「突拍子もないことを言わないでくれるか。ようやく私も事件に見切りを付けようとしていたんだ」

「見つけてしまったものは仕方ない。小さな疑問はやがて大きな疑問へと変わり、そしてそれが解けたとき本当の真相が見えてくる。時間がながい、まあ仕方ない。さあ、部屋をもう一度調べるぞ」

そう言った渋谷は部屋を改めて見回す。窓から逃げたとは考えにくく（いくらさほど高くはないとはいえ子供が飛び降りるには危険すぎる）かといって抜け道がどこかにあるようなかんじではない。もちろん隠れるような場所もない。

もしかすると沙織に協力した人物がいるのかもしれない。悩んでいた沙織が気の知れた相手に相談し、協力を求めた可能性もある。だ

としたらそれは誰か。沙織と仲が良かったといえば夢の中にも出てきた祖母の静代はどうだろう。それとも家政婦かもしれない。

そんなことを考えながら桑野を見る。しかし桑野はある一点を見つめたまま固まっていた。まだ頭が混乱しているのかと思ひ、「おい、しっかりしろ」と声を掛けたがそれでも反応しない。

「おい、お前も手伝え。きつと何かあるはずだ」

洪崎がそう言うのだが、桑野はやはり一点を見つめ、まるでそこに何かがあるみたいにあるいは何かが起きるはずと信じているみたいに瞬きもせず、そして震える声で言った。

「沙織は、もしかすると部屋から出てはいないんじゃないか」

「何を言っているんだ？ 頭がおかしくなったか」

「いや、おかしくなつてなどいない。冷静だ。むしろ今が一番落ち着いているかもしれない」

「何か分かつたのか」

「ああ。沙織はこの部屋にずっといたんだよ。家政婦が入ってきたときも。そして家政婦が死体を発見して出て行った後、自分も同じくして部屋を出た。一階に下りて今帰ってきたことを装うため玄関に立っていた」

疑問が洪崎の中に浮かんでいたが、あえて何も言わなかった。ただその口元を見つめ、次の言葉が出てくるのを待った。それを悟つたかのようにすぐに桑野は続ける。

「沙織は家政婦が気弱な性格だということを利用した。二階で物音がした時まつさきに気付くのは家政婦だ。祖母は玄関とは反対側の庭にいたし、父親は音の届かない奥の部屋にいたからな。死体を発見し、混乱した家政婦が真っ先にするのは、いつも頼りにしている浩太の所へ向かうことだ。沙織は部屋を出て行った家政婦を見届け、自分も一階へと降りていく。ただそれだけなんだ」

「そうだとすると沙織は何処に隠れていたんだ？」

桑野はそれに応えず、やはり先程と同じ場所をじつと見つめ、そのまま何も言わなくなつた。

渋谷は桑野の視線の先を追ったのだが、そこにはやはり何ら変わりのない風景があるばかり。

しかし、それは動きだした。部屋の隅にある子供用のベッド。その枕元に置かれたウサギのヌイグルミ。そのヌイグルミが意思を持ったかのようにあるいは見えない糸で誰かに操られているかのように突然自ら立ち上がり、ベッドから舞い降りたのだ。そしてこちらへと歩いて来る。二人の目の前で立ち止まる。長い耳に真っ赤な目。ピンク色の生地で作られている。ウサギの頭からナイフが生えてくる。先端が赤く染まった、恐らくは殺人に使われたであろうナイフ。いや、それは生えてきたのではない。中から突き出されたのだ。

その突き出たナイフはそのまま縦に切り裂かれる。布を切り裂く音が二人の耳を破壊する。二つに割れるヌイグルミ。そして中からナイフを持った無邪気な笑顔をした女の子が現れる。そして、『おじさん遊ぼう』と屈託のない声でそう言った。

両手に抱えるくらい大きなヌイグルミ。それはちょうど小学校低学年くらいの子供の大きさ。

彼女は見ていた。家政婦が部屋に入ってくる所を。あらかじめ綿を抜き簡単に着脱できるようにしていたヌイグルミの中で。

彼女はただ身を隠すことだけを考えた。あとのことなど何も考えていない。

彼女は頭が良くしかしやはり子供だった。その発想は子供にしか思い付くことは出来ない。

そして彼女は何もかもをうまくやってみせた。全てが偶然というわけではなかったが、それでも運は彼女に味方した。

桑野の視界が割れたガラスのようにバラバラになる。

もはや喋ることも考えることも動くことも出来なかった。そしてもうこの悪夢は二度と見なくなるだろうと桑野は思った。

ある元刑事の悪夢7（後書き）

いかがでしたでしょうか？

感想などをぜひお聞かせください。

「コーヒーには煙草とジャズが似合う」

マスターがそう言うのと渋谷は深く心から頷いた。

「まったくその通りだ。しかし似合うという表現は少し違うかもしれない。煙草とジャズでなければならぬと言った方が正しい。マイルスデイヴィスはトランペットではなくてはならないということと同じことだ」

コーヒーの香りを鼻で存分に楽しんだ後、ゆっくりとそれを口の中に入れる。最初は少量だけを入れ、舌先でその繊細さそして味を確かめる。それはワインのテイastingに似ている。それからまた少しだけ口に入れてそれを喉の奥へと流し込む。煙草を吸いコーヒーの香りを存分に堪能した鼻腔から吐き出す。最後に店内に流れるトランペットの音に耳を傾ける。

「私はこの瞬間、死んでもいいとさえ思う」

コーヒーカップを置き煙草を灰皿に押し付けた渋谷はそう言った。薄明かりの店内に客は渋谷一人だけだった。カウンターに椅子が五脚あるだけの小さな店だったが、センスのいいジャズをいつも流し、いて時には渋谷の知らないミュージックも聞かせてくれた。そしてなによりもコーヒーが美味かった。特にブレンドは渋谷のお気に入り、毎日飲んでも飽きるどころかその魅力にどっぷりとはまっけてしまいそうなくらい奥の深い味だった。毎朝起き抜けのコーヒーを届けに来てくれとマスターに本気で言ったこともある。

「このコーヒーにはあらゆる幸せが含まれているような気がする。それは私を存分に堪能させてくれ、悩み事を解消してくれること。もちろん、これからの人生への道を切り開いてくれているんだ。こんなに素晴らしいコーヒーはここにしかないだろう。そしてこのコーヒー以上に美味しいものに私は出会うことはないだろう。それはもしかすると残念なことかもしれないが、しかしその落胆すらも綺麗

に拭い去ってくれる力がこのコーヒーにはある」

渋谷はその独自の理論を言い終わると、一気にコーヒーを口へ入れた。口の中にしばらくコーヒーを閉じ込め一分ほど転がした後、だいぶ冷めた頃によく飲む。渋谷にとってそのコーヒーを飲み込むことは勿体無いという気持ちがあり、それでも飲み上げてくる喉奥あるいは胃からの要求に応えないわけにはいかず、惜しみながらもコーヒーを体の中へ入れるのだ。

マスターがレコードを変える。渋谷が一杯飲み終わるとマスターはいつもそうする。しかし渋谷はその変わったばかりの音を最後まで聞き終えたことはない。途中で腕時計を見て席を立つ。たとえこの後の仕事がなくてもあるいは休日だったとしても、彼には決められた時間というものが存在した。この『珈琲館』に滞在するのは十五分。それより短かったこともないし長かったこともない。一日のスケジュールを組む上で、そしてなるべく『珈琲館』にいられるように考えて時間を調整した結果、その十五分というのが最もベストだった。食事する時間も仕事をする時間も趣味を楽しむ時間も、常にびっしりと書き込まれたスケジュール帳によって渋谷は管理されている。しかし彼は時間に縛り付けられているという気持ちはもっていない。むしろ自分が時間というものを支配しているのだと思っている。時間通りに動くということは無駄を無くすということ。時間を持って余している人間ほど時間に束縛されているのだ。

そしてやはりこの日も曲の途中で渋谷は席を立つ。黒のトレンチコートに黒のスボン、そして靴も黒の革靴。その全身真っ黒な中で、鋭い眼光だけが光沢のあるものに見える。

「今日も仕事なのかい？」

マスターがそう尋ねると渋谷は短く「ああ」と返事をする。

「ありがとう。今日も素敵なコーヒーに出会えて嬉しかったよ。それと私のために早くから店を開けてくれて感謝している」

そう渋谷は残して店を後にした。

今日の一件目はバスに乗って三十分ほどの所にある。しかし渋埼はバスというものが嫌いだった。いやバスに限ったことではなく、あらゆる交通機関が嫌いだった。

たとえばバス停の時刻表に載っている時間にバスが一分も狂わず時刻通りにやって来たのなら、渋埼は何の文句もない。しかし今まで利用した中でただの一度もそういうことはなかった。早く来る分にはまだ許せるのだが、遅れて来るのはどうしても許せなかった。そのことで何度か運転手と言い争いをしたことがあるし、料金を払わなかったこともある。運転手が言うには、客の乗り降りで時間を食い、信号で時間を食い、日や時間帯によっては渋滞に巻き込まれることもある。だから五分くらいの時間の遅れは仕方がないということだった。

それならば時刻表というものを取り払ってしまえばいい。時間通りに動くということがどれだけ大事なことなのかを分かっている。いや分かるうとしていない。少しの遅れがまるでドミノ倒しのように次から次へと一秒単位で遅れ、最終的に時間から完全に孤立してしまいでしようもできなくなる。それがどれだけ恐ろしくてあつてはならないことなのかを理解していないのだ。今この瞬間も我々の寿命は短くなり、死へと真つ直ぐに何のぶれもなく進んでいる。つまり時間を無駄にするということは自分の死を無駄にしているということなのだ。生きているならば何故もつと計画性をもって動くとしなさい、何故もつと有効に時間を使おうとしなさい、何故時間に遅れることが許されるんだ。

やはりバスは二分遅れでやって来た。運転手は悪びれる様子もなくましてや『お待たせいたしました』の一言もなくただ無言でドアを開け、そしてやはり無言でバスを走らせた。

渋埼はそのバスがやって来るまで何度も時計に目をやり舌打ちをし、これではせつかく堪能したコーヒートの喜びが怒りで掠れてしまうと悪い気持ちを落ち着かせようとしたのだが、それでも込み上げてくるものを抑えきれず、煙草を何本も吸った。

車内では数人の客がそれぞれバスでの時間を思い思いに過ごしていた。渋谷のようにバスが遅れていることに対して怒っている者はいない。携帯電話をいじる者、隣同士で話す者、窓の外をぼんやりと眺める者、眠っている者。

渋谷は一番前の席に座り、信号で停車した時にでも文句を運転手に言っただけで済ませたのが、その運転手の顔を見てやめた。前にも文句を言ったことがある相手でその時は苦い顔をされて、まるで渋谷をたちの悪い酔っ払いのように扱ったのだ。これは言っても無駄だと思い、黙ってバスに揺られることにする。しかしどうにも収まらなかったで、降り際に百九十円の金を叩きつけてやった。

目覚めたばかりの街の景色というのは、物悲しくありそれでいて夜の喧騒をまだ残している。その華やかさを切なさや悲しさが覆い隠してしまっていて、まるでそれは人間の内に秘める心の悩みのように深く、観察しなければ読み取ることができない。しかし何故か気持ちを落ち着かせてくれる。

アーケード内に入ると形の違うしかし同じ顔色をした幾つものシャッターが並んでいた。まるで誰かを閉じ込めているみたいに無機質で冷たくそして重い。もちろんこんな早朝に開いている店などない。渋谷はそれらを見てなんだか世界に自分だけが取り残されたような気分になった。薄暗い道、シャッターの続く道を歩き、そして煙草を吸う。煙がまだ薄明かりアーケードの空に消えていく。時折、人とすれ違う。誰もが疲労に満ちた顔をして前を見て歩く。彼らばかりとひどい悪夢に悩まされているんだと渋谷は思う。それも飛びつきりややこしいあるいはいらつくほど長ったらしい悪夢に違いはない。考えただけで憂鬱な気分になった。

しばらく歩くと横断歩道に出る。車の通る気配はないのでそのまま渡る。そして渡った所、コンビニの隣にある五階建てのアパート。華やかな建物の隣に建っているせいか、そのビルは誰もが見過ごしてしまいそうなほど暗く陰湿に見えた。

時計を見ると六時五分。計画より一分遅れ。やはりあのバスのせいだ。

エレベーターに乗り最上階のボタンを押す。降りて右手に進んだ所。蹴り飛ばせばすぐに壊れてしまいそうな木製のドア。そしてインターホン。押してみたが中で鳴っている様子はない。表札には『木本』の文字。木本加奈子。

ドアを叩くとしばらくして中から魚眼レンズでこちらを伺う人の気配があった。

「どちら様ですか？」

酷く震えた声だ。それがドア越しに伝わってきて渋谷は少しだけ笑みを零す。

夢に怯える人間は実にもしろい。渋谷にとってみればまさしく夢のような世界のはずなのに、彼あるいは彼女らは未知の生命体でも出会ったかのように怯え混乱する。夢の中では無抵抗。見ている本人の感情あるいは本能になんの影響も受けず、ただ淡々と進んでいく。たとえばそれが映画の一場面だったとしたなら、目を背けることが出来るのかもしれないが、もちろんそんなことは無理である。だからおもしろい。やはり自分は神なのだと思う。

「木本加奈子だな？ 君には交渉する権限そして断る権限がある。もちろんその交渉は成立しない場合もあるしその断る権限もまったく無駄になってしまう場合もある。それはまず理解していただきたい」
ドア越しの相手、木本加奈子は何も言わない。ただ身を震わせているのが気配で分かる。

「私は夢処刑人だ。君の悪夢を処刑しにやって来た。君が悩まされている悪夢を私が取り払ってやる」

渋谷が続けてそう言ったのだがやはり何の返事もない。ドア一枚隔てた所に相手がいるのだけは分かる。こちらの様子を伺っている。「帰ってください」

しばらくしてから返事があった。先程よりも声は震え、それに加えて混乱もあった。

渋谷は首を左右に五回振り屈伸を三回してから「いいからここを開ける。君の悪夢はよく知っている。それを私が取り払ってやると言っているんだ。開けないならこのまま帰るぞ。次の依頼者が待っているからな」

そこまで言ったところでようやくドアが開く。静かな早朝のせいで、そのドアの音はひどく大きく聞こえた。まるで調弦されていないギターを力任せに引くような不快な音。

中から顔が出てくる。肩まで伸びた黒髪はなんの手入れもされていないことが一目で分かるほど、ばさばさで汚らしい。狐のような目に厚い唇。こけた頬。まるで墓場から這い出てきた死体のような顔をしている。青白さを通り越してその肌は完全なる青になりつつあった。ブラックライトを当てれば更に青さを増しそうだ。上下ピシンのパジャマを身に付けている。もちろん化粧はしていない。

「あなた誰なの？」

女が言った。詳しく言えば木本加奈子が言った。

「今も言っただろう？私は夢処刑人、渋谷光一郎。君の悪夢を処刑しにやって来たんだ」

「私の夢に出てきた人……？」

木本加奈子は半信半疑でそう尋ねた。

「その通りだ。ここでは私の詮索などなしだ。それと朝早くに来たことに関しては詫びを言う。今日はいつも以上に客が多いのであるべくそれを夕方の五時までに（まだ太陽が昇りきってもいないのに太陽が沈む頃の話をしてあまりぴんとこないだろうが）終わらせないといけないのだ。そのためには一件あたりの仕事をだいたいい平均して二時間前後で片付けないといけない。君のケースの場合は、二時間二分五十七秒で終わらせる、終わらせなければならぬ。だからさっそくで悪いのだが、やるかやらないか決めてくれ」

渋谷はそれだけ言ってしまつとまるでもう自分のやるべきことはやったという様子で、煙草に火を点けた。

「どういふことか説明していただいただけませんか？」

木本がそう言うつと渋谷は顔をしかめ「私の言ったことが理解できていないのか？ お前の夢を消し去ってやると言っているんだ。これ以上の説明はいらないだろう」

「夢というのは、つまり、私が見ている夢ですよね？」

「ああ、その通りだ。他に誰がいる」

「どうやって消し去ってくれるのですか？」

「お前の夢の中に私が入る。そして何故このような夢を見るのかを探る。そしてその原因を突き止める。ただそれだけだ」

「夢の中に入れるということ？」

「当たり前だろう。げんに君の夢の中に私はいたじゃないか。まさか覚えていないわけじゃないだろう？」

木本加奈子は思い出していた。昨夜見た夢のことを。夢の中だからはっきりとは覚えていないけれど、確かに目の前の男だったような気もする。

夢の中で彼女は真っ白な部屋の中にいた。見渡す限りの白。完璧な白。白のペンキを刷毛で少しのむれもわずかなずれもないように決められた量で決められた長さだけ塗り、位置を変えてそれを何度も繰り返し作り上げたような完璧な白だ。壁に目をこらして見るとその白に吸い込まれそうになった。

部屋の中には何も無い。ただ白が全体に広がっているだけ。その部屋の中央に彼女は立っている。それほど大きくはない部屋なのだろうが、色のせいですごく奥行きがあるように見える。しかし実際のところ八畳くらいの広さだ。その八畳の中に彼女はただ一人だけいる。しばらく佇んでいるとなんだかミルクの中に放られたような気分になった。私はクリスピーあるいはフレンチトースト。それともまだここは牛のお乳の中なのかしら。

部屋の中にしばらくいると自分自身も白になってしまったような感覚になった。ミルクの中に放られたのではない。彼女自身がミルクになったのだ。体が床や壁あるいは天井に張り付いていつの間にか体中が白に染められているのだ。それは自分が白になったという

不思議な感覚だ。

そのうちドアがあることに気付く。もちろんノブも白だったから最初は気付かない。目が白という色に慣れてきた頃に気付く。

ドアには鍵が掛かっていないようで、簡単にノブが回った。押せば簡単に開くだけけれど、どうしようか迷う。開けてはいけないような気がしたからだ。しかし、このままここにいても仕方がないと思つてノブを回す。足をドアの向こうへ踏み出す。

真つ暗だった。今まで白の世界にいたせいでその黒はより一層深く見えた。いや、黒というよりも闇だった。まったくの闇だ。しばらく手探りで歩いていると次第に目が慣れてきて、真つ黒な部屋にいるのだと気付く。今度は黒のペンキが部屋中に塗られているのだ。今度も白と同じように丁寧に。気分が悪くなる。呼吸がうまく出来ない。黒は彼女にとって負のイメージであり、体が受け付けない色だった。ドアを探すのだけだとさっきのように簡単には見付からなかった。白の部屋に戻ろうと思つたがドアは閉まっついていてそれすらも出来ない。この黒に慣れるまでかなり時間が必要だと思つた。あるいは慣れることなんてないのかもしれないと思つた。歩いていると壁にぶつかった。方向を変えて歩くとしばらくしてまた壁にぶつかる。それを何度か繰り返しているうちに、ドアのノブらしくものが手に当たる。捻ると今度も簡単にドアが開いた。白の部屋を出るときのような躊躇はなかった。

「青だ」

思わずそう声に出していた。今度は青の部屋だった。不気味な色だと思つた。歩くと何故だか宙に浮いているような感覚になった。もちろん青の部屋も完璧な青だった。彼女が見てきたどの青よりも青らしくありこの色こそが青と呼ぶに相応しいと思つた。しかし不気味な色に変わらない。

私は何を試されているのだろうと思う。あるいは何か実験的なことに無理矢理付き合わされているのではないかとも考える。しかし何の実験であるかまでは分からない。色とりどりの部屋を巡ることで

人間の心理にどう変化があるか。色が人間の体にどう影響するのか。いくら考えても答えは出ない。

今度は簡単にノブが見付かった。迷わずドアを開け次の部屋へと入る。

今度は赤色。もちろん完璧な赤。部屋の中央に小さな赤い色の机があった。あるいはそれは赤色ではないのかもしれない。全体が赤に染められているせいでそう見えるだけなのかもしれない。本当は杉の木が材料になっていて、それを職人が丁寧に組み立て最後に脚の下の方まで綺麗にむらのないようニスを塗って完成させた、誰が見ても惚れこむようなそんな素敵な机なのかもしれない。しかしそれは赤に完全に侵食されていた。ニスのきらめきも杉の木の年輪も見えない。

机の上に何かが乗っている。それがなんであるか最初分からなかった。赤色のせいではない。恐らく今まで一度も見たことがない物だったからだ。これは偽物？それとも本物？

机の上に乗っていたのは目玉だった。目玉が一つ。人間の目玉なのか、あるいは動物の目玉なのか。目玉は彼女のことを見ていた。すごく澄んだ瞳だと思った。白目は先程の白い部屋のように完璧に白であり、黒目は黒い部屋のように闇そのものだった。黒目の中で瞳孔が僅かに揺れているのが分かった。その中に彼女の顔が映っている。彼女の顔は赤だった。

彼女は目玉を手にとって見る。赤色に染められた目玉は表面がぬるりとしていて、今取り出されたばかりではないかと思うほど暖かかった。やはり目玉は彼女を見ている。

彼女はその目玉に何故だか親しみを感じた。目玉に親しみを持つなんて変だと思ったが、不思議と気持ち悪いだとか不気味だとかいう気持ちはなかった。前からこの目玉を知っているような気がしたのだ。

誰か知り合いの目玉なのだろうか？ だとしたら何故こんな所に目玉を置いているんだろう。あるいは殺されて目玉をくり抜かれたの

かもしれない。それは一体誰？

背筋を目玉が転がっていく。幾つも幾つも転がっていく。それは足元まで転がり今度は登ってくる。頭のとっぺんまでくるとまた足元を指して転がる。ぬるぬるした感触が何度も背中あるいは脚を舐めていく。

彼女は悲鳴を上げる。けれどそれは声にならない。声が出ないのだ。喉仏が目玉になっているのだ。だから声が出ない。指を喉奥に突っ込んで目玉を吐き出そうとする。しかし出てくるのは唾あるいは胃液。目玉は喉の中でゆっくりと転がっている。まるで彼女の呼吸に合わせて動いているかのようになり、口から吐き出されるのを嫌がるかのように。あるいは目玉には意識があつて（つまりそれは目玉が生きているということ）わざと転がるところと転がり彼女のことを笑っているのかもしれなかった。

手の中にあつた目玉が無くなっている。ああ、そうか。今、私の喉の中にいるのか。

『見ている。ずっと見ている』

何処からか声がする。辺りを見渡すが何もなし。その声は体の中から聞こえてくるような気がしたし、違う所から聞こえてくるような気もした。目玉が喉奥で速さを増しながら転がっている。まるでその声に反応しているかのようだ。

『君のことをずっと見ている』

辺りを見回す。誰もいない。あるのは完全なる赤。そして喉奥の目玉。

「誰？ 誰なの？」

声が出た。しかしその声は自分の声ではないかのように酷く濁っていて、きつと転がっている目玉のせいだと思った。がんばれば目玉を取り出せるかとも思い、先程と同じように指を喉奥に突っ込み吐き出そうとする。するとまるでそれが合図だったみたいに目玉が口から飛び出してきた。真っ赤な床に目玉が落ちる。ゆっくりと、ゆっくりと。

そこで目覚める。気持ちが悪い夢。もう二度と見たくない夢。いつもそう思う。そしてまだ目玉が喉奥に転がっているような感覚に襲われる。トイレにいった吐く。出てくるのは夢の時と同じように唾液と胃液だけ。目玉が喉に入っているわけがない。

「大丈夫。もうあんなひどい夢二度と見ないから」

つい言葉にしている。それはここが現実だとしてっかり確かめる意味もあつたし、絶対にもう見てはいけない夢だと自分の脳に訴えかける意味もあつた。

しかし彼女は見てしまう。次の夜も次の夜も。まるで彼女の意識の中に植え込まれたかのように、その夢を見ることが彼女の義務であるかのように。

「本当に私の夢を取り払ってくれるの？ あの悪夢をもう見なくすむの？」

木本が洪崎にそう尋ねる。

「ああ、もちろんだ。正確には取り払うのではない。君が何故そんな夢を見るのかを突き止めるんだ。それはもしかすると君の奥底に眠る邪悪な心がそうさせているのかもしれない。あるいは君の悩みやストレスが満杯になってしまい意味の分からないあのような夢を見ているのかもしれない。いずれにしても原因を突き止めそれをどうにかして夢を処刑する。それだけだ。つまり君がいつも見ているあの赤い部屋の夢を見なくてすむということだ」

木本はじつと洪崎を見つめしばらくしてから「中へどうぞ」と言った。洪崎は煙草を玄関口に捨てそれを革靴の踵で踏み潰した。

確かにそっくりだと木本は思った。いつも見る悪夢の最後の方に出てきた全身黒づくめの男。体系、喋り方、あるいは雰囲気もそのまま。そして彼は夢の中で言った。『苦しいか？』と。木下はその意味をもちろん理解し頷き、もし救ってくれるのなら、この悪夢を取り払ってくれるのならどんなにいいだろうという思いを懇願に変え

男に訴えた。すると男は深々とまるで何かの儀式みたいにお辞儀をし『君の悪夢を処刑に行く』と言った。

渋谷は部屋を見渡す。まるで女のその味気ない雰囲気象徴しているかのように質素で、古びた部屋だった。台所とリビング。そして浴室とトイレ。部屋を支えている木製の柱は汚れた油をぶちまけて何年もそのままにしていたかのような色をしている。一人で住むにはちょうどいいのかもしれないが、それでも何故かこの部屋には胸を圧迫されるようなあるいは息苦しくなるような雰囲気があった。あまりにも中が簡素すぎるせいかもしれない。ベッドと一人用の机。本棚と箆笥。それだけ。

渋谷は机の前に座り木下に断りもなく煙草を吸った。

「きちんと説明してください。あなたが何者なのか、そして私の見る夢とどう関係しているのか。もちろんあなたを部屋の中にも上げたということは、あなたを信用したということ。しかし信用したけれどもまだその信用は確信ではない。もしかすると私の中にある警戒心みたいなものが、あなたは大丈夫だと判断しただけかもしれない」

木本は煙草を吸う渋谷を見下しながら言った。溜め息を吐く渋谷。「私には時間がない。だから先程の私の説明で理解してほしかった。しかし君はあくまで依頼者であり私はその依頼を引き受けた者だ。君との信頼関係を最初で築く必要があるし、これから短い間だが君と同じ時間を共有するのだから、理解し合うことは大切だ」

渋谷はそう返すと灰皿はないかと木本に聞き、木本が灰皿を差し出すと持っていた煙草を押し付けた。木本もテーブルの上にあった煙草を取り吸った。彼女の煙草は薔薇の香りがした。

「私は人の夢の中に入れる。そして人の夢を解消してやる。それが仕事だ」

煙草の煙（正確には薔薇の香り）に嫌悪感を抱きながら渋谷は言った。木本はそんなことは分かっているとも言いたげに首を左右に振り、煙を天井に吹きかけながら「あなたが夢の中に入れること

は分かりました。そう簡単に信じられるようなことではないけど、あなたは確かに私の夢の中に出てきたし、私の夢のことも言い当てた」

「ああ、その通りだ。なあもう充分だろ？ 早く決めてくれ」

しかし木本は考えている様子だ。薔薇の煙が彼女の痩せ細った顔を覆っている。

何を躊躇う必要があるのだと渋谷は思う。納得のいかないことあるいは恐怖があるというのなら拒否してもらっても構わない。いや渋谷にとってはそれが一番いいことだ。そうすることで時間の余裕が出てくるしこの後の仕事もスムーズにいく。バスが遅れたことだつて気にすることもなくなる。

「一つだけ聞いていいですか？」

木本が言った。

「なんだ？」

「私の夢を見てどう思いましたか？ その、つまり私は精神に異常があると思いましたが？」

「精神に異常があるとは思わなかった。何故そんなことを聞く？」

「だってそうじゃないですか。こんなに毎晩、毎晩同じ夢を見るなんて頭がおかしくなったのかもと思うでしょ？ それも決して気持ちのいい夢ではない。むしろ気持ち悪い。不気味だし」

渋谷は顎に手を当てて何かを考えている。そして「恐らくお前が見ている夢は、誰かの気持ちあるいは感情が創り出したものだろう」

木本は渋谷のその言葉を理解しようとする眉間に皺を寄せたが、どうもうまく飲み込めないのど「どういうことですか？」と聞いた。

「周りにお前のことを恨んだり妬んだりしている奴はいないか？」

いや、実際に分からなくてもいい。なんだかそんな気がするという奴はいないか？ 友達でも職場の人間でも誰でもいい」

「そんな人いません。私は誰かに妬まれたりするほど何かに長けているわけでもありませんし、容姿も見ての通り良くありません。仕事だって出来る方でもないし」

「それでは恨んだりする奴は？」

「絶対にいないとは言いませんが、たぶんいないと思います。人はほんのちよつとしたことで人を恨みます。そうでしょう？ただ肩がぶつかっただけで殺意を抱く人もいれば、見た目が気に入らないというだけで怒りを露にする人もいます。そんな世の中にいけば逆に誰からも恨まれないなんてありません」

そう言うとき木本は煙草を灰皿に押し付けた。薔薇の煙が最後の悪あがきみたいに灰皿の中で舞い上がる。それは彼女の腕をあるいは彼女の顔を舐めるように広がっていったが、手で三回ほどあおぐとすぐに消えていった。木本は煙がしっかりと空気の中に溶け込むのを確認してから「何故そんなことを聞くんですか？」と渋谷に尋ねた。

「お前を恨んでいる奴がいたとする。お前のことを殴ってやりたい、困らせてやりたいあるいは殺してやりたいとそいつは常日頃思っている。その感情が知らず知らずのうちにお前の中に入っていく」

「私の中に感情が入る？」

「ああそうだ。それはもちろん目には見えないし感じ取ることも出来ない。しかしその感情は確実にお前の中へと入っていくんだ。風邪のウイルスのようなものだ。気付いたら喉が痛いあるいはくしゃみが止まらないということと一緒だ。その感情は、お前の中で膨れ上がり夢という自身では制御できない世界へと誘われる。つまりそれが現在見ている夢なんだ」

「つまり誰かの感情が私にうつってしまいそれが夢になっていると？まさかそんなことありえないでしょ」

「いや、ありえないことではない。むしろそういう事例は今まで幾つもあった。現実では絶対に起こり得ないことが簡単に起きてしまう。それが夢というものなんだ。今回のお前の夢も、そんな他人の感情が夢の中に入り込んできているようだ」

「そんなこと分かるのですか？」

「ああ。これはただの悪夢とは少し違う。どう違うかと言われれば

うまく説明できないんだが、例えるなら体に伝わってくる空気みたいなものが違うんだ。普通の夢が爽やかな風だとしたら、お前のような夢の場合は少しだけじっとりとしてるんだ。湿気を帯びていると言えればいいかな」

木本は目を閉じた。そして一体誰が自分のことを恨んでいるのか考えてみた。しかし誰一人として頭には浮かんでこなかった。何よりも自分が社交的ではなく友達もあまりいないことを分かっていたし、その友達でさえも最近では（最近といっても一年もの間）連絡を取った記憶がない。仕事仲間とも遠からず近からずの付き合いをし、誘われれば飲みに行くこともあったが、楽しいと思っただことは一度もなかった。集団でいるのが苦痛だったし、その集団の中で感じる異常な孤独感がたまらなかった。つまらない人間だといつも思う。たとえば身近に自分のような人間がいたとしたら（あるいは自分を客観視したとして）決して近付こうとは思わないし、どうしようもない人間だとも思う。もしかしたらこんな私の暗くて憂鬱な性格が誰かの怒りを買っているのではないだろうか？ 見ているだけでイライラする、あるいは顔を見ただけで仕事のやる気なくなるなんて思っている人がいないとは限らない。いやむしろそういう人はきつというはずなのだ。

洪崎はそんな木本の感情を読み取ったかのように言った。

「君の中に入り込むくらいだから、それはとてつもなく大きくて強い感情なんだ。」

「大きくて強い感情？」

「ああ、どうしようもなくな。だからほんのちよつとした日頃のイライラでは駄目なんだ。お前が考えているよりもそれは大きなものだ」

そう言われて木本は更に分からなくなってしまった。果たして自分を恨んでいる（それもとてつもないほど大きい。自分が考えているよりも遥かに大きい）人物は誰なのか。

「分かりました。私の夢を取り払ってください」

木本は言った。洪崎が本当にいいのか？ と訪ねると木本は強く首を縦に振った。

洪崎は「そうか、分かった。それでは目を閉じ夢の中のことを思い浮かべてくれ。そうすれば私は夢の中へすんなりと入っていける。それとあと一つだけ言っておく。私は夢とは別に君の記憶の中を探る場合がある。特に痛みなどはないが、少しだけ息苦しく感じるかもしれない。しかし悪夢を処刑するために必要なことだから理解してもらいたい」

木本は返事もせずただ目を閉じている。その表情は洪崎の言葉を聞いていないようにも見え、理解したうえで表情にも見え、念のため洪崎が同じことをまた言っていると、今度はゆっくりと先程の頷きとはまた違った（覚悟を決めたようなあるいは死を覚悟したようにも見えた）首の振りをした。ゆっくりと縦に顔が動く。ゆっくりと、ゆっくりと。

「目を開けていいぞ」

洪崎がそう言ったので木本は目を開けた。夢に見たあの真つ白な部屋だ。やはり完璧な白だ。その中に佇む洪崎の黒が霞んで見えるくらいの白さ。そのまま洪崎を見続けていれば彼は白の中に溶け込んでしまいまた自分は一人になってしまうのではないかと思い、洪崎から目を離す。離れた先にもあるのはやはり完璧な白。他に何も無い。じつとしていると目眩がしたので、とりあえず歩き回ってみる。しかし歩き回ってみても本当に自分は歩いているのかと思ってしまう。意識だけが動いているだけで、本当はじつと同じ所に立っているだけなのではないかと思う。それを確かめるつもりで先にいる洪崎を目指して歩く。ゆっくりではあったが、黒い色が徐々にはつきりと目に入ってきたのできちんと自分は歩いているのだと安心する。

「何も無いな」

洪崎が言った。「しかし芸術的なほど白い。こんなに美しい白は今まで見たことがない」

洪崎は辺りを三回ほど見渡した後で、顎に手を当て眉間に皺を寄せた。それからその格好のまま壁の方へ顔を寄せる。目を細め壁をじつと見ている。まるで美術館の絵を丹念に見ているかのようだ。

「何を見ているんです？」

木本がそう尋ねると洪崎は何をくだらない質問をしているんだといった表情で木本を見た。そして「決まっているだろう。この美しい白を見ているんだ。この部屋に他に見るものがあるか？」

洪崎はそれだけ言ってしまつとまた壁に目を向けた。

木本は夢の中でのあの感覚を味わっていた。白と一体となつていくような感じ。いや、これは一体になるというよりも、もともと一つだったものが分裂してしまい、また元の一つに戻るうとするよう

な感覚。

洪崎が指を鳴らす。その音は、天井を突き抜けるかのように高く響いた。

真つ暗な部屋に木本は立っていた。いや、これは夢で見た第二の部屋。つまり真つ暗なのではなく真つ黒なのだ。完全なる闇ではなく暗幕。目を閉じているのではなく目を塞がれたのだ。

「何も見えないな。さっきの部屋が白すぎたせいで目が痛い」

洪崎の声がする。それは何処か遠くから（あるいは先程の白い部屋から）聞こえてくるようでもあったし、すぐ近くから聞こえてくるようでもあった。感覚がおかしくなっていると木本は思った。体中の感覚がそれこそ暗闇をさ迷っているかのように狂ってきている。聴覚は音の区別をつけられず、視覚は色の変化に怯え、指先あるいは足先の感覚は何を頼っていいのかと混乱している。

「何か分かりましたか？」

洪崎にそう尋ねてみる。それは洪崎が自分の近くにいるのかあるいは遠くにいるのかをもう一度確かめる意味もあった。

「何も分からないよ。この部屋が何を意味するのか検討もつかん」

その声は木本のすぐ横で聞こえた。

「何も分からないんですか？」

「ああ、分からん。だが心配するな。私はもつと不可解な夢と対峙してきた。どの夢も全て私が処刑してきた。時間が限られているといつても焦る必要はない。じっくりと考えるんだ。しかしここは真つ暗で何も見えないな。場所を変えよう」

洪崎がそう言うと、また指を鳴らす音がした。やはりそれは高く響く。

海の底はもしかしたらこんな色をしているのかもしれないと木本は思った。どの色にも汚されていない純粹な青が彼女の周りにはあった。歩くと床の軋む音がした。足裏に青色が付いているのではないかと思ってしまう、足を持ち上げ目で確認する。靴底に青色は付

いていないのだが、それでも歩く度に気になってしまい、その動きを何度もしてしまう。その姿は下手くそなダンスのステップを踏んでいるように見えた。うまく音楽に合わせて体を動かそうとするのだが、バランスを崩して足を持ち上げてしまう。そんな風に見える。青色は塗りたてのペンキを連想させるんだと木本は思った。思い込みというやつだ。

「お前の話を聞かせてくれるか」

渋谷が言う。木本と同じく足裏が気になっているようで、下手くそなステップを踏んでいる。

「私の話ですか？」

木本がそう聞き返すと渋谷は足の動きを止めて「ああ、そうだと聞いた。」

「私の話というのはどういうことですか？」

「お前の話だよ。最近あったことや、昔の思い出でもいい。幼い頃どんな子供だったとか、どんなことをして遊んでいたとか、どんなアニメが好きだったとか、あるいは学生の頃の恋話でもいい。もちろん仕事場で失敗したことや褒められたことでもいい。誰にでもそういう話は一つや二つある。とにかくお前の話を聞きたいんだ」

「私は平凡な女です。お話できるような思い出はありません」

「平凡なら尚更だ。平凡な人間にこそ多くの思い出がある。なにも恥ずかしい思い出を要求しているわけではないし、難しい問題を出しているわけでもない。自分のことについて話すだけでいいんだ」

「私の話を聞いてどうするつもりなんですか？」

「お前の思い出の中から夢を解決する糸口を見付けられるんだよ」

「そう言われても本当に何もありません」

「それならばこちらから問いかけるとしよう。お前は男を何人知っている？」

「男？」

「ああ、そうだ。何人の男と寝たことがある？」

木本は何も返さない。ただ黙っている。何か言おうと口を動かす

のだが、そこから声は出てこない。出てこないというより、出すタイミングがないといった様子だ。

「お前、男を知らないのか？」

渋谷がそう質問すると、木本は顔を強張らせ俯き、青色の床に向かつて鋭い眼光を送った。そして「私を見れば分かるでしょ？こんな暗くて美しくない女を誰が相手してくれると思います？」

「それならば恋をしたことはあるか？」

「恋ですか？」

木本には恋という言葉がひどく自分に相応しくないようなあるいは対極に位置しているような気がした。初めて聞かされた言葉であるかのように、うまく耳へあるいは脳の中へ入っていない。しばらく恋について考えを巡らせていたが、うまくまとまらず木本は何も応えることが出来なかった。そこで渋谷が質問を変える。

「男に惚れたことがあるのか？」

そこでようやく木本は言葉の意味をうまく理解できたかのように、何度か頷いた後「ええ、それはもちろん。私も女ですから」

「告白したことは？」

「ありませんよ。告白したところで返事は決まっていますから」「どういう答えが返ってくると？」

「もちろんノーです。いい答えが返ってくるとは思いません」

「何故だ？ 告白もしていないのに」

「だから言ったでしょ？私は見えての通りの女。誰も相手になんかしてくれません」

いつの間にか木本は赤い部屋に立っていた。そして目玉を手に持っている。それはやはり生暖かくて独特のぬめりがあった。木本のことをじっと見つめている。

背中を目玉が這いずり回る感覚があった。一個ではない。二個や三個でもない。背中感覚を頼る限りでは、数十個はある。それが背中を行ったり来たり。生暖かくて、ぬるぬるした目玉が背中を嘗め回していく。鳥肌が全身に立ち、木本は声を上げる。目玉はまる

で這いずり回ることが義務であるかのようになり、あるいは木本の苦しみを楽しんでいるかのようになり、転がり続ける。木本は持っていた目玉を落とす。目玉は赤い床を転がり洪崎の足元で止まる。

「夢の中にも何も見付かりそうもないな」

苦しむ木本など気にも止めず洪崎は言った。そしてしばらく腕を組んで考えていたが、何か思い付いたのか指を一つぱちんと鳴らした。

木本はベンチに座っていた。二人が座れるくらいの小さなベンチ。元が何色だったのかは分からないが、ペンは綺麗に剥げ落ち、変わりに赤茶色の錆がベンチを侵食している。背中を探ってみたがもう目玉はないようだ。目の前に広がる光景があまりにも現実的すぎて、本当に目玉など背中にあつたのだろうかと疑問に思う。

太陽が眩しい。その眩しさは確実に肌に染み渡り瞼を焼き、届くはずもないのに思わず太陽に手を伸ばしていた。木の葉が揺れる音がある。生物の呼吸の音がある。風が体をゆっくりと撫でていく。すぐ近くにブランコがある。四歳くらいの女の子がブランコを漕いでいる。後ろには母親がいて、女の子の背中を押してやっている。女の子がもっと強く押さないと高く漕げないよと言うと、母親が危ないから駄目よと優しく叱った。側には小さな砂場があつて、男の子二人が山を作つて遊んでいる。一人が頂上へ何度も砂を乗せ、もう一人はきつとその山にトンネルを開通させたいのだろう、崩れないように様子を伺いながらそつと中心めがけて穴を広げていく。開通計画はどうやら上手くいったようで、山を拡大していた方の子供が綺麗に空いたトンネルを見て歓声を上げる。それにつられてもう一人も誇らしげに笑う。

ここは、公園。それも見知った公園だ。仕事の昼休憩はこのベンチに腰掛けて買ってきたサンドウィッチを食べる。今見ている光景もいつもと同じだ。午後の何の変哲もない穏やかな光景。

会社から歩いて五分も掛からない小さな公園なのだが、彼女にとつ

てはここが安息の場所であり、会社という檻の中から解放されその羽を伸ばせる場所でもあった。

会社の人々は誰もが神経質な顔をしながら書類に目を通し、申し合
わせたかのように舌打ちや歯軋りをしている。そして書類を見てい
る時よりも更に不機嫌な顔をして木本を呼ぶ。彼女が呼ばれる時は、
だいたい誰もがやりたがらないような雑用を頼むときだ。残業を頼
んだりもする。他にも女子社員はいるはずなのに、決まって彼らは
木本を呼ぶ。きっと私は文句も言わないし、残業をしたところで特
になんの支障もないと思われるのだ。それに顔も悪いから男も
いないと思われている。実際にそうだし、たとえ文句を言ったとこ
ろで彼らはもう私のことを見てはいない。また神経質そうな顔で書
類を見るのだ。木本はきつと彼らは機械なのではないかと思った。
決められた書類を見て、決められた通りに舌打ちや歯軋りをする。

そして木本を呼んで仕事を任せる。そうプログラムされているのだ。
それに目だつて冷え切っている。冷凍庫の扉を開けて一晩中その前
にいたのではないかと思うほど、冷たくて怖い。そしてその瞳の中
にはまるで潤いなどなく、絶望的なほど広い砂漠のような乾きだけ
きつと彼らはロボットなのだ。誰がなんのためにそうプログラムし
ているのか分からないが、そうじゃなくてはおかしいと思った。

しかし、と思う。そのロボットに言われるがままに行動する私も
またロボットなのではないか。私もまたロボットの一部分なのかもし
れない。考えはいつも堂々巡り。だから昼休憩になると彼女はこの
公園にやってくる。ロボット以外の生身の人間を見たいと思うから
だ。それはこういった公園が一番いい。公園には会社には絶対にな
いあらゆるぬくもりがある。それは母親のぬくもりであったり、子
供のぬくもりであったりする。そしてそのぬくもりに触れてみて自
分は決してロボットなどではないのだと確認する。ロボットは人間
のぬくもりに触れることはできても、それを心に感じ取ることはで
きない。

遠くの方には小さな池がある。綺麗な池とはいえないが、貸しボ

トがあつたし、鯉も数匹泳いでいる。腰の曲がった老婆が池に餌を投げ込んでいるのが見える。老婆が餌を投げる度に水が大きく跳ねる音がした。キャンバスに池を写生している青年がいる。あんな汚い池をよく書こうと思うものだ。

「ここはお前の記憶の中だ」

いつの間にか渋谷が横に座っていた。脚を組んで煙草を吸っている。煙草を口にくわえたまま大きな伸びを一回する。それから太陽を見上げそこに向かって煙を吐きかける。それは本当に午後の時間を堪能しているかのように見えた。

「私の記憶の中なのか分かりますけど、どうしてこの場所なんです？ もっと他の記憶があるでしょう？ こんな所よりも私と直接的に関わりのある場所へ行きましようよ。例えば仕事場とか。ここは昼休みのちよつとした時間しか利用しないんですから」

木本がそう言うつと渋谷は煙草を地面へ投げ捨て、それから首をゆつくりと横に振った。木本の意見を否定していた。

「どうやらこの場所が重要らしいんだ」

渋谷が言った。

「この場所が重要？」

「そうだ。さつきも言っただろ？ 誰かがお前のことを強く恨んでいると。その恨みがどこからきているのかを辿ってみた。するとこの場所が出てきた」

そう言われた木本は改めて辺りを見渡してみた。特に変わったところはなく、いつも見ている光景が平和にそして平凡にあるだけだった。自分の見ているあの不気味な夢とはどうにも結びつかない。老婆は餌をまいているし、青年はキャンパスに絵を描いているし、子供は無邪気に遊んでいたし、風もなだらかに流れている。

「少し歩いてみよう。何か分かるかもしれない」

渋谷はそう言って立ち上がる。木本もそれに倣って立ち上がる。少しだけ目眩がした。

二人はまず砂場で遊ぶ子供達の所へ向かった。やはり子供達は楽

しそくに砂山を作っている。子供が作ったものだけあって、形もトンネルも上手いものとは言えなかったが、それでも彼らにしてみれば十分に満足したものなのだろう。なんども土を貼り付けて傾斜をつけたのか、山の至る所に小さな手形が残っていた。

ブランコに乗る少女の喜ぶ声が聞こえた。少女があまりにもせがむのでとうとう根負けした母親は、少女の背中を思い切り押してやっていた。少女を乗せたブランコは大きな弧を描きながら空へ向かって飛び出していく。それを心配そうに母親が見つめる。

木本は普段の自分自身を思い浮かべていた。目は先程まで座っていたベンチに向けられる。昼休みに一人で公園のベンチに座りサンドウィッチを頬張る姿は客観的に見てどうなのだろう。それは決して昼のわずかな時間を楽しんでいるあるいは有意義に過ごそうとしているようにはどうしても見えない。誰かと待ち合わせをしているようにも見えない。

それから二人は池の方へと向かった。池は綺麗とはとても言い難かった。水底の苔だったり、あらゆる食べ物のカスだったり、誰かが酔っ払って放出した小便だったり、不気味に混ざり合った色をしている。その中を奇妙な形と色をした数匹の鯉がさ迷っている。ある鯉はある鯉の尾をずっと追い掛け、ある鯉は餌もないのに口をパクパクと動かし、ある鯉はその場で何度も周っている。鯉が動き回る度にあちこちで波紋が蜘蛛の糸のように広がる。太陽の光がそれらを一瞬だけ、しかしその一瞬を繰り返して光り輝かせている。

袋を持った老婆がその池に向かって餌を放ると、波紋は一箇所に大きく広がりがなかなか消えることはなく、ようやく消えそうになったところでまた同じ場所に餌が投げ込まれ、波紋はまた広がる。

「すぐ汚い池。だけどなんだか見ていてほっとします」

木本はそう言いながら渋谷の方を見た。しかし渋谷は木本の言葉など聞いておらず、別の場所に気を取られているようだった。

「どうかしたんですか？」

「ああ、あいつが気になるな」

そう言って渋谷は、池を写生している青年を指差した。

「どうして気になるんです？」

「あいつはいつもあそこにいるのか？」

「ええ、だいたいいつも。あそこで池の写生をしています」

青年は見たところ二十代前半といった感じだ。黒のパンツに青のパーカーを着ている。キャンバスに向かって真剣に筆を動かしている。細かい部分でも塗っているのか、とても神経質に目が動いている。眉間に皺も寄っている。しかし気に食わないのか、舌打ちをする。筆を折らんばかりに強く握りしめキャンバスを睨みつけ、少ししてからまた色を塗り始める。

「あいつ池なんか一度も見てないぞ」

渋谷の言うように、キャンバスと青年の体は池の方に向いているのだが、青年は一度も池に目を向けていない。しかし時々キャンバスから顔を逸らせて、何処かを見ているような素振りはある。目を細めているので遠くの風景でも描いているのだろうかと木本は思ったが、どうやらその目は公園で遊ぶ子供達に向けられているようだった。視線を追うと砂山の子供あるいはブランコで遊ぶ少女にぶつかる。

「子供達を描こうとしているんですかね？ それならもっと近くに寄ればいいのに」

木本がそう言っていると渋谷が「いや違う」と否定した。

「恐らく描いているのは子供ではない」

「それじゃあ何を描いているんです？ まさかあの鯉に餌をあげているお婆さんではありませんよね？」

渋谷は青年の視線を注意深く追っている。顎に手を当てている。眉間に皺を寄せる。そしてゆっくりと言った。それは午後の緩やかな日差しに乗って、あるいは暖かで滑らかな公園の風に乗って木本の耳に届いた。

「老人ではない。描いているのは恐らくお前だ」

「私を描いている？」

「ああ、お前だよ」

「どうして私を？」

「どうやら私は勘違いしていたようだ。私はお前が誰かに恨まれているのではないかと考えていたんだが、どうもその逆だったようだ。お前は好かれていたんだ」

「好かれていた？」

木本は首を捻る。上手く理解出来ないので渋谷の次の言葉を黙って待つ。

「お前はあの青年に気に入られていたんだよ」

青年を見たまま渋谷が言う。

「彼はお前のことが好きだったんだ。そしてお前の姿を絵に描こうとした。一人でベンチに座る寂しげな女性の絵。なんだか哀愁のある絵が出来そうな気がしないか？」

木本は絵のことなど何も分からなかったから、ただ首を傾げるばかりで、そして何よりもこんな容姿の悪い自分を気に掛けてくれている人物がいたということに驚いていて、もしそれが本当であるならば果たして私はどうすればいいのかと考えていた。

「見たことのある白。あれはキャンバスの白だ。つまりお前を白いキャンバスに描きたいという欲望が創り出したもの。あの白い部屋にはそんな意味があったんだ」

渋谷が得意げな顔で言う。思っていたよりも早く終わりそうなので安心していうようだ。

「それじゃあ、あの黒い部屋、青い部屋、赤い部屋はどういう意味があるんです？」

木本がそう質問すると、渋谷は簡単だと言って唇を吊り上げた。

「あの部屋は色を象徴したものだ。つまり黒はそのまま黒色を、青はそのまま青色を、そしてもちろん赤は赤色を」

「それではあの不気味な目玉は？」

「あれはお前の目だ」

「私の目？」

「ああ、そうだ。彼はお前の目がすごく気に入ったんだ。お前の姿を描きたいのはもちろんだが、その中でも特に目を描きたかった。その思いが彼の中で強くなり、あのような奇妙な夢になってしまった」

木本は思わず自分の目を（詳しくは瞼の上を）触っていた。こんなみつともない目を好きでいてくれる人がいるなんてとても信じられなかったからだ。それにこの狐のように釣りあがった目は、木本が顔の中で最も嫌っている箇所でもあった。鏡をなるべく見ないように日頃からしてはいるのだが、それでも絶対に見ないというわけにもいかず、ついなにかのはずみで鏡を見てしまうことがある。それは公衆便所の鏡であったり、店の中の鏡だったりする。そしてその鏡に映った自分の顔を見る度に、木本はこの釣り上がった目を憎く思うのだった。そう思えば思うほど鏡の中の自分は、ひどく歪んでいくのだ。

「私の目を描きたいなら、あんな遠くからでは何も分かりませんよ？もっと近くに来て描かなくては」
手を瞼に当てたまま木本が言う。

「それが出来たら彼の思いはこんなに強くなったりはしない。お前の周りには親子連れがいる。男が一人でそんな場所に行ってみろ、いくら絵を描いているとはいえ不審者と思われ警戒されてしまう。親に警戒されるということは、つまりお前にも警戒されるということだ。そんなことになったらもうベンチには座ってくれないかもと思ってしまう。だからといって、いきなりあなたの絵を描かせて下さいと言うもの変だ。だからあの場所で絵を描いている。遠くからしか見えないから、どうしてもああいう歯痒い顔になってしまう」
確かに青年の顔は絵が上手く描けないというよりは、描こうとしている対象をきちんと見てみたいあるいは近くで見てみたいという欲望の顔に見えなくもなかった。

「それでは私はどうすればいいんでしょうか？」
木本は青年のその歯痒そうな顔を見ながら言った。

「簡単なことだ。彼の元まで行ってどうぞ私を描いて下さいと言っ
んだ」

「彼、戸惑ったりしませんかね？」

「きつと戸惑うだろうな。思いを寄せている人からいきなり声を掛
けられるんだから驚きもするだろう。だからいきなり私を描いて下
さいと言つのではなく、何をいつも描いているんですか？ と尋ね
てみるんだ。彼は当然慌てるだろう。そこでお前が言うんだ。もし
私を描いているのなら何も気にすることはありません。私を描いて
いることは知っていました。そしてそのことについて私は気分を害
したりだとか、やめてほしいと思ったことはありません。だからど
うぞ続けてくださいと」

洪崎がそう言ったのだが木本はなにか迷っているようだった。

「どうした？ それとも本当は描いて欲しくはないのか？」

「いえ、そうじゃないんです。私を描いて下さっているのはすごく
嬉しいんです。なんだか本当に夢みたいで。私を気に入ってくれて
いるのも恥ずかしいけれど、嬉しいですし」

「それではなにをそんなに迷っている？」

「どんな顔で彼の元へ行けばいいのか分からないんです。私あまり
人から好かれたことがないものですから。嫌われている人に対して
向ける表情の作り方は知っていますが、好かれている人に向ける顔
はどうすればいいのかなんて。もちろんそのままの自分の顔で行け
ばいいのは分かっているのですが、それがうまくいくかどうか」

洪崎はしばらく腕を組んだまま考えていた。うまい答えが出てこ
ないようでそれはしばらく続いた。そして結局何も思い付かなかっ
た洪崎は、「とりあえず声を掛けてみる。表情など気にするな。声
を掛けてみれば案外うまくいくかもしれない」

「そんな無責任な」

「無責任ではない。お前はきつとうまい表情など作れるわけがない
んだ。分かるか？ どんなに頑張っても野球少年はメジャーリーグ
へは行けないし、どんなに速く走ろうとしても人はチーターには勝

てない。出来ないことを無理にする必要はないし、無理にしたところで失敗することは分かっているのだから、ありのままの自分でい
くことが大事なんだ」

「ありのままの自分」

「そうだ。ありのままの自分だ」

「それでうまくいくのでしょうか？」

「うまくいくかいかないかは問題ではない。お前が一つ勇気を出して彼に声を掛けることによって、悪夢が消えて無くなるんだ。彼が逃げ出してもあるいは避けられてもそれはそれで仕方がないと思わないと何も解決しない。それはそれ、これはこれなんだ」

「それはそれ、これはこれ」

木本は洪崎の言葉を注意深く聞いていた。まるで裁判所書記官みたい
に一言一句を聞き逃すまいとしていた。今にも鉛筆かペンを持つて目眩がするほど細かい字で、洪崎の言葉を紙に書きだしそうだ。
「とにかく彼の元へ行くんだ。結果は後から付いてくる。しかしその結果を決して期待してはいけない。悪い方に転がることもあればいい方に転がることもある。勝負は時の運だ」

「勝負は時の運」

木本はその言葉を口の中で三回唱えてから、彼の方へと向かって行った。その歩き方はすごく不器用で、なんだか後ろから支えてやらねばひっくり返るのではないかと思うほどだったが、洪崎がしっかりしろと声を掛けてやるとそれで気合が入ったのか、足はしっかりと地に付き、きちんとした歩き方になった。その後姿は、初めて異性に告白する女子中学生のような緊張感が漂っていて、その肩に触れればたちまち場面は学校の体育館裏に変わり、遠くで待つのは学ランを着て同じく緊張緊している坊主頭の少年に変わってしま
いそうだった。

洪崎はきつとうまくいくだろうと思っていたから、夢を取り払った後、向かうべき次の依頼人の場所を調べるため胸元のポケットから手帳を開いてページをめくった。次は歩いて十分もない場所だ。

依頼人が多い場合、どの依頼人から済ませていくかで時間はかなり違ってくる。やっかいだと思うものを先に済ませておくのか、それとも後にしておくのか、あるいは後日にまわすのか。その判断を一つ間違えるだけで時間は大幅に狂ってくるし、そうになると手帳に書いた一日のスケジュールの意味がなくなってしまう。つまり時間を支配しているのではなく、支配されてしまうことになってしまふのだ。そんなこと決してあつてはならない。そう思いながら渋崎は時計を見た。そして木本の方へ目を向ける。

彼女は首を絞められていた。青年によって。

木本の顔は驚きと絶望が混じっていた。顔色が次第に青くそして赤くなつていくのが分かった。目は瞬きすることなく強く大きく開かれ、そこから涙が溢れている。その目は青年を見ようと必死なのだが、恐らく映っているのは遠くそして青い空だけだろう。そして最後にその顔はまるで夢の中の白い部屋のように真っ白に、鮮やかなほど真っ白になった。それは皮肉にも今までの木本加奈子が渋崎に見せたどの顔よりも美しかった。体がゆっくりと倒れる。真っ黒で長い髪が彼女の顔を覆い尽くしていく。

そうか、あの部屋は彼女の死（もつと詳しく言えば彼女が死んでいく顔の色）を現していたのか。つまり、あの青年は木本を殺したいほど憎んでいたということか。しかし何故こんなことになってしまった。そう思い渋崎は青年が向かっていたキャンパスを見た。

そこにはブランコに乗る少女の背中を、微笑みながら押している母親の姿が描かれていた。その表情もそうだったが、瞳が見惚れてしまうほど美しく描かれている。

渋崎は公園の方を見る。そうだったのか。彼はあの母親を描きたかったのか。彼の視界にはいつも木本が入っていた。母親とその子供を描きたいのに余計な者が被写体に入っている。

「邪魔なんだよ、お前。ベンチに座るんじゃない」
そう青年が言った。

地が揺るぎ空間が歪む。渋崎はここから出て行かなくてはならな

った。そして指を鳴らす。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8753w/>

夢処刑人

2011年9月27日00時05分発行